

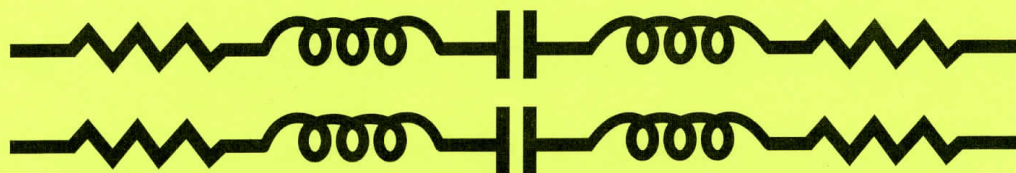
岩手大学電気電子情報科会誌

# きたかみ

創立70周年記念特集号

第 58 号

2012年3月発行



# 平成 24 年度総会並びに懇親会開催のご案内

平成 24 年度の電気電子情報科会総会は、下記のように開催することになりましたので御案内申し上げます。なお、盛岡支部総会も併せて行います。会員各位の多数のご参加をお待ちしております。

なお、住所や勤務先等の確認にも使用させていただきますので、綴り込みのハガキで総会への出欠を、1ヶ月前の平成 24 年 5 月 16 日までにご連絡を頂きたくお願い申し上げます。

## 記

日 時 平成 24 年 6 月 16 日 (土)

盛岡支部総会 午後 2 時 30 分～ 3 時 00 分

総 会 午後 3 時 00 分～ 4 時 00 分

講 演 会 等 午後 4 時 00 分～ 5 時 00 分

懇 親 会 午後 5 時 00 分～ 7 時 00 分

場 所 岩手労働福祉会館  
盛岡市大沢川原 2 丁目 2-32  
TEL 019-651-7961

議 題 1. 平成 23 年度事業報告、決算報告承認  
2. 平成 24 年度事業計画案、予算案審議  
3. その他

講 演 会 演題「創立 70 周年記念祝賀会を終えて」  
講師：寺 井 正 行 氏 (昭和 41 年電気卒)  
祝賀会実行委員長・東京支部名誉支部長

懇親会会費 5,000 円 (懇親会席上で、昨年秋・今年春に叙勲された方を御紹介し、祝意を表します。  
叙勲された方を御存知の方はお知らせ下さい。)

連 絡 先 総会出欠・叙勲された方の紹介等、会誌「きたかみ」に綴り込みのハガキを使用するか、  
下記事務局宛電話、FAX 又は E-mail 等でご連絡下さい。

岩手大学電気電子情報科会事務局 (岩手大学工学部電気電子・情報システム工学科内)

長 田 洋 TEL・FAX 019-621-6381

E-mail osada@iwate-u.ac.jp

木 村 彰 男 TEL・FAX 019-621-6488

E-mail kimura@cis.iwate-u.ac.jp

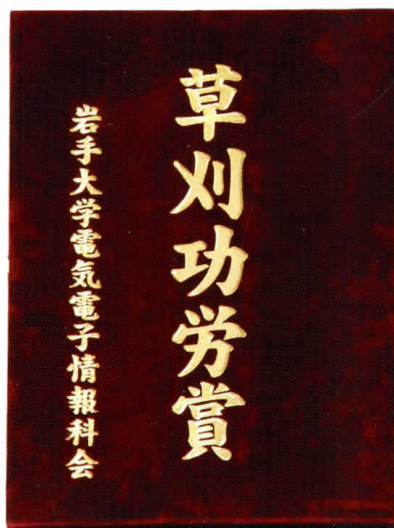
柳 橋 好 子 TEL・FAX 019-686-2253

E-mail t.k-yngbs@nifty.com

# 岩手大学電気電子情報科会 創立70周年記念特集



表彰式 受賞者 吉田登美男氏 佐々木喜八郎氏 山崎時男氏 阿部源祐氏



草刈功劳賞 表彰楯

## 記念式典・表彰



賞状と副賞のクリスタルガラス



柏葉安兵衛 会長あいさつ

記念式典



藤井克己 岩手大学長祝辞



渡邊喬一 祐会会長祝辞

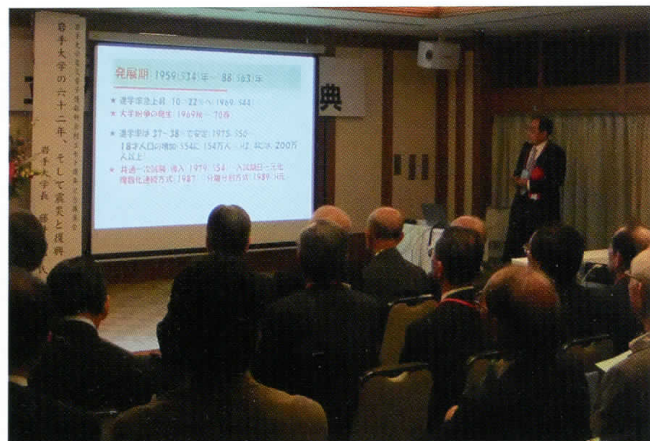
あいさつ・祝辞



恒川佳隆 学科長祝辞



講師 岩手大学長



講演の様子

記念講演

# 祝賀会



黙とう



吉田登美男  
祝賀会実行委員会  
顧問あいさつ



太田原功  
岩手大学同窓会  
連合会長祝辞



祝宴（大江戸さんさ）



逍遥歌大合唱



寺井正行 祝賀会実行委員長のエール



澤藤隆一 東京支部長  
閉会のことば（万歳）

集合写真



1 回目



2 回目

## — 年会費納入のお願い —

年会費につきましては、卒業後年 1,000 円の年会費を 10 年ごとに 1 万円納入していただいております。第 1 回目のお願いを終了し、その後は卒業後 10 年に達した方に依頼の文書等を発送しております。

しかしながら平成 13 年以前の卒業の方で、納め忘れの方が大変多くいらっしゃいますので、再度納入のお願いをさせていただきます。

会の運営上、是非ご協力のほど、お願いいたします。

同封の郵便局の赤い振込用紙に卒業年・学科・氏名・電話番号をご記入の上振り込んで下さいますよう、よろしくご願ひいたします。

# 目 次

創立 70 周年記念特集カラー写真	綴じ込みカラーページ
会長挨拶	会長 柏葉安兵衛 1
70 周年記念事業	2
退職した先生からの寄稿	馬場 守 16
電気電子工学コースの近況	電気電子工学コース長 恒川佳隆 18
情報システム工学コースの近況	情報システム工学コース長 西山 清 19
草刈賞 第 8 回 (平成 22 年度) 草刈賞受賞者	20
《支部だより》 平成 23 年度東京支部報告	22
平成 23 年度仙台支部報告	23
平成 23 年度盛岡支部報告	24
平成 23 年度電気電子情報科会総会	25
平成 23 年度総会特別講演	齊藤 健 26
平成 23 年度電気電子情報科会総会議事録	28
平成 22 年度決算書	29
平成 23 年度予算書	29
平成 23 年度電気電子情報科会役員名簿	30
平成 23 年度電気電子・情報システム工学科の構成員名簿	31
平成 23 年 年表	32
資料：理事会議事録	34
岩手大学電気電子情報科会会則	36
東日本大震災	宮手敏雄 37
トピックス・編集後記	40
平成 24 年度総会並びに懇親会開催のご案内	表紙裏
年会費納入のお願い	巻頭色紙



## ご 挨拶

会長 柏葉安兵衛（昭和38年(1963年)電気卒）



会員の皆様にはご健勝にてお過ごしのこととお喜び申し上げます。  
会誌「きたかみ 58号 創立70周年記念特集号」をお届けいたします。昨年3月に発生した東日本大震災は、特に津波によって恐ろしい大被害を東北地方の太平洋沿岸にもたらしました。それに福島原発事故が重なって、災害復興を複雑なものにしています。この震災によって殉職された会員や帰省中に津波に遭って亡くなった準会員もおられます。さらに、ご家族、ご親戚、ご友人知人を亡くしたり、あるいは被災されて深い悲しみの会員も多いことと思います。心からご冥福をお祈り申し上げると共にお悔やみとお見舞いを申し上げます。この震災に関して、宮手敏雄氏（電気44年卒）からご寄稿をいただいております。

また、専門1回卒業の佐藤利三郎先生（東北大学名誉教授、東北学院大学名誉教授）は、昨年4月にお亡くなりになりました。先生は仙台支部長をお務めになったほか、最近まで毎年母校で講義なさるなど、熱心に後輩のお世話をして下さいました。工学部本館の玄関に設置されております草刈遜先生の胸像は、「草刈先生ご生誕100年記念実行委員会」に佐藤先生がご寄付されたものです。心からご冥福をお祈り致します。

さて、本会は本年1月1日で創立70周年を迎えました。これを記念し実行委員会を立ち上げ、「岩手大学電気電子情報科会創立70周年記念事業」を進めて参りました。震災のため一時は実行が危ぶまれましたが、昨年10月29日（土）に、東京「アルカディア市ヶ谷」で藤井学長先生始め沢山のご来賓のご臨席のもと、およそ160名の会員が出席して記念式典を開催し、科会の創立、維持発展にご功績のありました会員に感謝状（草刈功労特別賞、草刈功労賞）と記念の盾を贈呈することができましたことは大きな喜びでございます。しかし、すでにお亡くなりになった先輩も多く、感謝状を差し上げる機会を失ってしまったことは残念な限りです。学長による記念講演会は大好評でした。また、震災で犠牲になった方々の鎮魂から始まった記念祝賀会は、感動的かつ非常に盛大なものでした。詳細につきましては、本号の特集部分および添付のDVDをご覧ください。70周年の記念行事が心に残る成功を収めましたのは多くの会員のご協力によるものでありますが、特に、開催地をお引き受け頂いた東京支部（支部長澤藤隆一氏）のご協力と祝賀会実行委員会（委員長寺井正行氏）のご尽力のお陰でありまして、厚く御礼申し上げます。

平成23年3月で馬場守先生がご定年により退職されました。馬場先生は昭和51年11月に東芝研究所からご着任になり、以来35年の永きにわたって電気系工学科と大学院で教育研究に力を注がれたほか、工学部長の要職もお務めになりました。先生の教えを受けた会員は多数に上りますが、各地で大いに活躍しております。本号に先生からご寄稿をいただきましたのでご覧になってください。

これまで、会員の皆様方から震災義捐金、草刈賞へのご寄付や桜の木の植樹など、母校に対して様々な形でご寄付が寄せられておりますが、昨年故池田俊夫先生並びにご家族の皆様からは本会に対してもご寄付を頂きました。財政難の折ですので特に有り難く、厚く御礼申し上げます。

科会では会の運営のために会員から毎年1,000円の「年会費」いただくことになっております。卒業後10年を経過した会員に対し10年毎に、まとめて1万円をご請求申し上げていく所です（本号綴じ込みのカラーページをご参照下さい）。未納の方には同封の振り込み用紙（赤色）で、是非とも納入にご協力下さいますようお願い申し上げます。昨年は封入の際のミスから、既に納めていただいた方にも振り込み用紙が同封されてしまい、大変失礼しましたことをお詫び致します。

本会は卒業生の心のよりどころであり、また母校と繋がる場でもあります。今後ともご協力、ご支援をお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

## 《岩手大学電気電子情報科会創立70周年記念事業の概要》

創立70周年記念事業の実施は、平成22年6月の総会で了承されてスタートしました。その後理事会で事業の内容、実行委員会メンバーなどを検討し、開催地は東京にお願いすることなどを決めました。11月27日に開催された第一回実行委員会で、東京支部から記念式典や祝賀会を東京でお引き受けするとの回答をいただき、実質的にスタートしました。翌年3月には東日本大震災などが発生して開催が危ぶまれましたが、関係各位のご努力により計画を上回る成功を収めることができました。

### ◆◆◆ 事業内容 ◆◆◆

事業は記念式典と功労賞の贈呈、記念講演会、記念祝賀会、「きたかみ特集号」発行の4つです。記念式典、記念講演会、記念祝賀会は平成23年10月29日(土)東京市ヶ谷の「アルカディア市ヶ谷」で行われました。プログラムと内容は以下の通りです。

<受付開始、アトラクション：13：30～>

#### 1. 記念式典と功労者の表彰（15：30～16：30）（司会 理事 長田洋氏（S62））

記念式典：会長挨拶、来賓祝辞（藤井克己岩手大学長、渡邊喬工学部一祐会会長、恒川佳隆電気電子・情報システム工学科長）

功労者表彰：選考委員長報告 太田原功氏（S30）

草刈功労賞贈呈：科会の創設維持発展に貢献した会員18名（うち出席者4名）に感謝状（草刈功労特別賞、草刈功労賞）と副賞のクリスタルガラスを贈呈し、感謝の意を表しました。

受賞者代表挨拶 阿部源祐氏（S16）

#### 2. 記念講演会（16：30～17：30）（司会 理事 長田洋氏（S62））

講師 岩手大学藤井克己学長、演題：「岩手大学の62年、そして震災と復興」

<記念写真撮影（17：30～18：00）>

#### 3. 記念祝賀会（18：00～20：00）（司会 東京支部副支部長 山田均氏（S47））

黙祷・詩朗読 小野寺瑞穂氏（S28）、挨拶 祝賀会実行委員会顧問 吉田登美男氏（S28）、祝辞 岩手大学同窓会連合会長 太田原功氏（S30）、祝電披露、祝宴、乾杯 相談役 山崎時男氏（S24）、歓談、さんさ踊り、大合唱、中締め 祝賀会実行委員長 寺井正行氏（S41）、閉会の辞 東京支部長 澤藤隆一氏（S47）。

#### 4. 「きたかみ特集号」の発行

会誌「きたかみ58号 創立70周年記念特集号」を平成24年3月に発行。本号の発行をもってすべての事業が終了しました。本号には記念式典から祝賀会までの模様や、今回発掘された逍遥歌などが入ったDVDが付いています。科会では70周年記念事業を広く会員にお伝えして科会に関心を持って頂き、また後世に残すために、祝賀会実行委員会にお願いして制作して頂いたものです。

難しい状況の中にもかかわらず本事業を成功裏に終えることができましたのは、偏に会員の皆様のご協力によるものであり、心からお礼申し上げます。

#### ●実行委員会委員名簿（委員は会長、副会長、理事、相談役若干名、前東京支部長、前仙台支部長で構成）

委員長（会長）柏葉安兵衛（気38）、委員（副会長・事務局）柳橋好子（子45）、委員（副会長）千葉則茂（気50）、委員（副会長）鳥谷部達雄（情56）、委員（理事）小野寺瑞穂（気29）、委員（理事）歳弘 健（気33）、委員（理事）井上隆志（気40）、委員（理事）田山典男（気41）、委員（理事）立花龍一（情61）、委員（理事・事務局）長田 洋（気62）、委員（理事・事務局）木村彰男（情H3）、委員（理事・盛岡支部長）旗福 寛（気38）、委員（理事・東京支部長）澤藤隆一（気47）、委員（理事・仙台支部長）佐々木良治（気43）、委員（相談役）阿部源祐（S16）、委員（相談役）山崎時男（S24）、委員（相談役）太田原功（気30）、委員（相談役）佐々木喜八郎（気28）、委員・祝賀会実行委員長（前東京支部長）寺井正行（気41）、委員（前仙台支部長）齊藤健（気38）

## 《 70 周年に寄せて 》

岩手大学長 藤井 克己



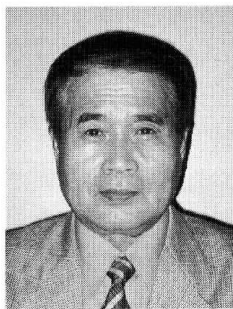
岩手大学電気電子情報科会の創立70周年、まことにおめでとうございます。昭和14年（1939年）に設立された、盛岡高等工業学校電気科を始祖とする貴学科は、新制岩手大学工学部において電気工学科（S24, 1949年）へと生まれ変わり、その後、電子工学科（S41, 1966年）と情報工学科（S50, 1975年）を増設するなど、常に工学部の中心的な位置を占めながら今日に至っています。当初の1学年定員30名が26年間で3学科分120名へと4倍に増加したという、量的な変化もさることながら、電気～電子～情報と、この間に教育研究内容の拡充・展開が図られたことは、まさに特筆されることです。

啐啄（そったく）同時という言葉で表されるように、社会の大学に求める人材像、学科の進

める実学的教育プログラム、学生の学習志向性が、緊密にかみ合っていたわけで、工学教育の精華をここに見るようです。ここに至る先輩諸氏の努力に感謝の意を表します。

さて昨年3月11日の東日本大震災から早くも1年が経とうとしています。今回の大震災は、私たちが生きていく上で何が重要なのか、価値観や人生観の問い直しを求めるものでした。同時に、生産や流通におけるサプライチェーンの途絶に直面すると、一元的な集中システムのもつ脆弱さにも気付かされました。今後は分散したシステムの連携と協働、これらの代替と補完などがキーワードとなる、スマートさと頑健さが、諸システムに求められることになるでしょう。脱工業化社会とも言われる今日の、これらの再構築について、貴会の関係各位が尽力され、さらに存在感を発揮されるものと期待しています。

一祐会会長 渡邊 喬



科会創立70周年おめでとうございます。

東京で開催された70周年記念式典・祝賀会に出席させて頂き、会場あふれんばかりの会員の皆さんにお会いでき、楽しく過ごさせていただきました。工学部の前身盛岡工業高等学校は

昭和14年5月に設置され、1回生は昭和16年12月に卒業されております。電気科1回卒の阿部源祐さんの話によりますと、開学当時は、岩手公園脇の中津川沿いの仮校舎で2年間授業を受け、その後上田の新校舎へ引っ越し、新校舎での授業は半年しかなかったということでした。この引越しなどの忙しい中、電気1回生の皆さんは科会設立の準備をされ、卒業と同時に科会を立ち上げ、後輩に引き継ぎ、70周年を迎えられたことは、本当に喜ばしいことです。

昨年の9月頃でしたでしょうか電気科卒の山崎時男さんの案内で工学部発祥の地である中津川沿いの仮校舎跡を、科会会長の柏葉先生ら数人で見てきました。現在はきれいに整備され岩手公園の一部になっていました。皆さんも盛岡にいらした時は、ぜひ岩手公園にいらして下さい。石川啄木の「不來方のお城・・・」の歌碑、宮沢賢治の「岩手公園」の詩歌碑なども建立されています。すぐそばには盛岡文化歴史館も建っております、ごゆっくりとご見学ください。

一祐会は二回生が卒業した昭和17年9月に設立されており、今年の9月が70周年になります。今年の9月16日に70周年記念式典・祝賀会を開催致すべき準備をしております。ぜひ、一祐会の70周年記念行事にもご参加ください。

電気電子情報科会が今後80周年、100周年と益々発展されますことを心から期待しております。

## 《 あ の 頃 》

特別会員（科会顧問）佐藤 淳



電気電子情報科会創設70周年を心からお祝い申し上げます。そして創立の時からここに至る、卒業生の皆様、諸先輩、諸先生の御努力と御苦心を思い、衷心より敬意と感謝をお捧げ申し上げますにいたしません。

私が岩手大学に奉職したのは昭和26年4月のことでした。校舎のすぐ側にあったNHKの逆L字型のアンテナに代る新型の垂直円筒型アンテナの工事が丁度はじめられた頃でした。その頃の工学部各学科の学舎は木造平屋建てで、玄関から一番奥の体育館に向かって延びた中央廊下の左右にありました。西側に金属と電気、東側に鉱山と機械の4学科でした。本館は2階建てで、2階に学部長室と事務長室そして会議室がありました。教授会や忘年会また御用納め、永年勤続者の表彰更に卒業式などもこの会議室で行われました。1階は事務系の部屋、西から庶務、会計、そして東側に教務係と保健室がありました。

電気工学棟の入口には職員の名札盤がありその下に鍵をぶら下げた鍵盤がありました。今では考えられない牧歌的な時代でした。大らかなそして安全なあの頃が誠に懐かしく思い出されます。

入口を入った最初の部屋が鎌田徳美先生の部屋でした。先生の部屋の入口には机の上に製図提出のための箱がのっておりました。当時先生は電気工学設計製図も担当されておられたのです。続く2つの部屋が草刈先生の部屋でした。ある寒い冬の朝、徹夜で実験した小生に温かい手作りの味噌汁を御馳走して下さった先生の御温顔。「そんなことをしていると体を壊すよ」と叱られました。懐かしい限りです。続く部屋が、小生の着任当時は後藤良先生、その御退官後は、あの「メダカの学校」を、集まりの折など御披露されるのが常だった大内三千三先生でした。あの懐かしい御笑顔で、何でも受け取られ受け

入れて下さった先生。実に懐かしいです。その次は物置として書類などをしまっておく部室。その隣が事務室の大部屋でした。事務員は当時斎藤和子さん、その後富樫泰規さんが事務担当に当たられました。この部屋には丸い大卓、そしてあの懐かしい薪ストーブがあり、冬の昼休みなどストーブの周りで楽しい集まりをもったものでした。事務室に続いては、松本憲吾先生の部屋がありました。着任当初小生は松本先生の部屋に同居させて頂きました。志田先生御着任後は北分室ができるまでこの部屋で御一緒致しました。そして久保田先生、一戸先生の部屋となります。その次は三つほど実験室が続き、入江先生の部屋となります。通信実験室には二重の網が張ってありました。その次が照明実験のための暗室。そして西端が藤田先生の部屋でした。お昼休みになると野球のユニフォーム姿の藤田先生が飛び出して来るものでした。北隣の共通棟からは山崎さんも。そして渡り廊下を通過して強電実験室、その西側がその準備室で沼田六七八さんがメータ等を綺麗にみがき保守点検などにも当たっておられました。その北隣が高電圧実験室で10万ボルトの試験用変圧器があり球電極間にボガンボガンと火花を飛ばしておりました。この高電圧実験室は、沼田さんが東北大学に出張し、小生の着任前に整備して下さったものです。因に高電圧変圧器は進駐軍により穴に埋められていたものです。強電実験室への渡り廊下から北側に工作室があり、上田幸作さんと富樫さんがここにおられました。

以上、思い出すままにあの頃の電気棟の模様を記させて頂きました。誤りがあったらお許し下さい。ここで70年前、電気科会が誕生致しました。それから星霜70年、あの実験の邪魔になった電波を放射し続けた円筒型垂直アンテナは、とうの昔に矢巾に移築されております。時のうつろいを思わずにいたしません。科会の一層の御発展と、会長様はじめ皆様の御健勝をお祈りして、筆を擱かせて頂きます。

## 《「山手線」の旅》

特別会員（科会顧問）志 田 純 一



岩手大学の電気科会がこのたび70周年を迎え、「きたかみ」の特集号を作成されるとのこと。先日、柏葉先生が訪れこの計画を話され、私にも執筆の依頼があった。最近大分老化を感じ、果して責任の取れる作品が提供できるかどうか覚束無い。しかし、一応前向きに検討してみようと思い、その題名を冒頭に示したように決めてみた。これを読む時は山と手の間に“の”の字を入れて「山の手線」と読むのが正しい。こんな題目を選んだ理由の一つは、私が東京に生まれ東京に育ち、歳と共に望郷の念が強まりその地に無性の懐かしさを覚えた所為でもある。

表題に示した山手線は、ご存知のように循環線であるため、内回り線、外回り線という名でその行き先を区別しているが、いずれの線に乗っても時間さえ気にしなければ目的の駅に着ける。一周しても通過駅は29駅、走行距離は35km、所要時間はほぼ1時間である。閑があればひと回りしてみるのも面白い。昨年末に私もその一周乗りを楽しんだ。以下はその記録の紹介である。

池袋駅は私が生まれ育った土地板橋から一番近い山手線の駅であるので、この駅をスタート点として内回り線を走る。まず、その隣の駅が目白。学習院の学生、生徒が多数乗り降りするのが目立つ。続く駅は高田馬場。堀部安兵衛の仇討で有名なところである。一駅走ると名高い新宿がある。山の手有数の繁華街であり、憩いの場でもある。そこには東京都庁があり、新宿御苑も有名である。その昔、恩師の草刈先生のお供をして桜花を眺め歩いた記憶が懐かしい。次の駅が代々木。明治神宮で有名なところ。広い参道も正月には参詣の人で溢れる。昔、父親に手をひかれ参拝したのを思い出す。そして原宿駅。その名は江戸時代の宿駅に因み付けられるが、今は若者向けの店舗が立ち並び賑わう。

池袋駅は私が生まれ育った土地板橋から一番近い山手線の駅であるので、この駅をスタート点として内回り線を走る。まず、その隣の駅が目白。学習院の学生、生徒が多数乗り降りするのが目立つ。続く駅は高田馬場。堀部安兵衛の仇討で有名なところである。一駅走ると名高い新宿がある。山の手有数の繁華街であり、憩いの場でもある。そこには東京都庁があり、新宿御苑も有名である。その昔、恩師の草刈先生のお供をして桜花を眺め歩いた記憶が懐かしい。次の駅が代々木。明治神宮で有名なところ。広い参道も正月には参詣の人で溢れる。昔、父親に手をひかれ参拝したのを思い出す。そして原宿駅。その名は江戸時代の宿駅に因み付けられるが、今は若者向けの店舗が立ち並び賑わう。

続く渋谷も副都心の一つとして繁栄、多くの支線の発着点で、人の流れも多い。駅前の「忠犬ハチ公」の銅像は待合せの目印に。私も何度か利用させてもらった。次の恵比寿駅に続いて目黒駅がある。ここには浄土宗の祐天寺があり、東京工大も有名である。二駅乗り継ぐと品川である。山手線から西方面への分岐点であるが、歴史的には江戸の南の門戸であって、品川沖の幕府築造の砲台は観光客の足を止める。また、十返舎一九の「東海道中膝栗毛」も思い出すと楽しい。品川から田町、浜松町を経て新橋へ。鉄道唱歌にも歌われたように、新橋は日本の鉄道の発祥地であり、大衆演劇の興行所として有名な新橋演舞場がある。その隣駅が繁華街として、また出会いの街としてもよく知られる有楽町。隣接する日比谷公園は日本最初の洋式公園で、都民の憩いの場。東京駅はそのすぐ隣。赤レンガ造りの古めかしい駅舎は一見に値するが、周囲のビル群に囲まれすっかり見えにくくなってしまったのは淋しい限りである。なお、東京見物の一つの足であるハトバスも観光には大変便利で、上京の折にはよく利用させてもらう。続く上野駅は東北、上信越方面への玄関口。長い歴史と行き交う人の流れには多くの喜びと涙が。私が東北入りした当時はまだSLが常磐線を走っており、その夜行列車がよく使われた。駅に隣接する上野公園は今は大衆の集う行楽地であるが、歴史的にも有名。その南西にある不忍池は蓮の名所で、池の辺を歩く老若男女の姿は微笑ましい。上野を過ぎ、しばし電車の揺れに身を任せていると、程なく巣鴨駅に。駅から少し歩いた所に「とげぬき地蔵」の名で知られる高岩寺があり、香の薫りが旅人の心を安らげてくれるのは嬉しい。隣は一駅おいて池袋である。

原稿枚数を気にしながら急いで山手線一周記を書いたので、骨だけで肉のない文になってしまった。興味と時間の余裕が付く御仁は是非この「ミニ旅行」をお試し下さい。なかなか味のあるコースです。

## 《草刈功労賞表彰》

電気電子情報科会70周年記念事業として、科会初の功労者表彰を起案、実行委員会の中に「表彰者選考委員会（委員長 太田原功）」を設置して表彰者を決定し、2011年10月29日の記念式典において表彰いたしました。

### 1. 選考基準

- ・会長、支部長として科会振興にご尽力された方々
- ・会長、支部長の職には就かなかったが、科会の振興に格段の貢献をされた方々
- ・選考時の年齢が満80歳以上の方々

### 2. 受賞者（18名）

- ・草刈功労特別賞（創設・振興）：阿部源祐（第2代会長）
- ・草刈功労特別賞（振興）：山崎時男（第10代会長、第2代盛岡支部長）
- ・草刈功労賞（会長）5名：第4代 岡田整八 第5代 佐藤源美 第8代 阿部長一  
第7代 中村忠男 第13代 池野九平
- ・草刈功労賞（会長/支部長）2名：第6代・第9代会長、初代盛岡支部長 高木三郎  
第19代会長、第3代盛岡支部長 佐々木喜八郎
- ・草刈功労賞（東京支部長）2名：第4代 富田弘平 第6代 吉田登美男
- ・草刈功労賞（仙台支部長）4名：第4代 砂子田融 第5代 山崎克己 第6代 藤原昭二  
第7代 千葉智行
- ・草刈功労賞（振興）3名：鈴木辰三 佐藤 淳（顧問） 志田純一（顧問）

### 3. 表彰楯・副賞

副賞は草刈先生の写真を彫刻したクリスタルガラス（盛岡市内ガラス工房に特注して作成、巻頭のカラーページの写真をご覧ください）

### 4. 参考

#### ①ご逝去者 15名

- ☆会長（8名）：初代 草刈 遜 第3代 小沢甚一郎 第11代 山本辰吾  
第12代 熊谷 昇 第14代 安保寅丙 第15代 針生俊夫  
第16代 佐々木浩 第17代 細川哲男
- ☆東京支部長（3名）：初代 志村 馨 第2代 澤 亮 第5代 鰐淵 実
- ☆仙台支部長（3名）：初代 富士 岳（第3代東京支部長） 第2代 佐藤裕郎  
第3代 佐藤利三郎
- ☆功 労 者（1名）：高見澤敏夫

#### ②ご辞退者：（功労者）藤村泰造

## 《草刈功劳特別賞を受賞して》

阿部源祐（昭和16年専門1回卒）



科会創立70周年記念式典の式場で会員、来賓多数参列の前で草刈功劳特別賞を戴き、光栄に感じ非常に感激致しました。有難うございました。

私にとって平成23年10月29日は忘れられない日となりました。ステージに上がり会長より功劳賞を頂戴した時は数々の思い出が走馬灯の如く、次から次へと湧いて来る瞬間でした。

この中から少し皆さんに紹介しておきたい事を述べさせて戴きます。

### 1. 草刈先生のご意志を実現したい

先生は科会設立の当初、会員は卒業生と在校生で構成する事を望んでおられましたが、学校当局の規定により実現出来ませんでした。しかし戦後科会復活の打合わせの時は強く発言なされておりました。草刈先生と久保田先生と私と3人で草刈先生の下宿でこたつを囲んで打合せしたのが、思い出されます。そして、改正原案で実現したのです。会誌6号で承認されたはずの改正案が幻の会則となり、実現されませんでした。当時私は釜石におったので、臨時総会に招集されませんでしたので理由は分かりません。私は、今でも実現に努力したいと強く思っ

ております。この事は会の活性化になり一祐会の基盤を強くすると確信しています。

### 2. 友人 富士岳君の死を悼む

平成22年9月入院先の病院に奥様からの死亡通知の葉書が届き私は愕然としました。しかも死亡した9月3日は私の手術日だったのです。

彼とは入学当初からの友人で、「卒業記念アルバム作製委員」と「電気科会設立準備委員」のメンバーとして、共に頑張った仲です。彼は科会東北支部長であり、本部代行として会長を補佐して戦中困難時代に会誌の発行を5号まで続けた功績は大なるものがあります。70年の発展のもとを築いたのも彼だと思えます。

また同期会も私と共同で取り纏めていました。科会創立70周年記念祝賀会が東京で開催することが決定になった時は、東京で共に科会の思い出を語り合うつもりだったのに残念でありません。

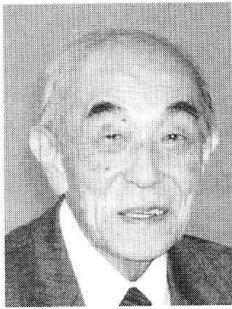
### 3. 電気電子情報科会のさらなる発展を

創立70周年記念祝賀会の慶びに有頂天になり酔いしびれることなく、この慶びをスタート台のバネにして、次の10年の発展に向かって努力しましょう。

科会に幸あれ！！

## 《草刈功労特別賞を受賞して》

山崎時男（昭和24年専門8回卒）



岩手大学電気電子情報科会創立70周年、誠にありがとうございます。この記念式典の席上に於いて草刈功労特別賞を戴きました。生涯最高の光栄な事と感激致しております。私は幸運にも盛岡工業専門学校・岩

手大学工学部に学び修業出来、恩師草刈先生はじめ諸先生方、同窓・同級の方々に巡り合いました。そしてご教示・ご薫陶頂いて研鑽出来、その上皆様のご好意によりこのたび受賞の栄誉を賜わり、科会の皆様に唯々深く感謝しております次第です。

盛岡高等工業学校（後に盛岡工業専門学校と改称）は私が盛岡市立杜陵小学校6年生の春、中津川の向かい盛岡城跡の一角に仮校舎で開校しました。当時、時代の要請により設立された全国7校の中の1校で、各地の激しい誘致運動の末、教育環境のよい盛岡市に決まった経緯がありました。後日、私はこの学校に進学し今日あることは、誠に感慨深いものがあります。

私の盛岡工専入学は終戦の翌年昭和21年春、学校は当時、進駐軍の命令により移転させられていた厨川（現在の青山地区）に在った旧陸軍の兵舎跡で、工専6回、7回の上級生が在学しておりました。ここで1学年を過ごした時、上田校舎が返還になり2学年・3学年を本校舎で勉学出来ました。教職員生徒一丸となり学校環境・校舎・実験室等、完全復旧に努め、又この事により先生生徒間も親密になりました。

私は工専を卒業して2年間高校に勤務、昭和26年春、母校の昇格した岩手大学工学部共通科に採用され、数学科の柴宮先生・物理科の土居先生の御指導のもと、学習と物理実験で各工学科の学生諸君に親しくお付き合いが出来ました。

昭和27年10月、電気工学科の恩師一戸先生の所に配属替えになりました。一戸研究室には卒業研究で大学1回生5名の元気で愉快的な学生達がおりました。その時から私は岩手大学電気科会の仕事をお手伝いする事になりました。

世情まだ落ち着かない時期、盛岡に工学教育・工学研究の種子を播かれた草刈先生のもと、一戸英敏先生（昭17）、久保田哲郎先生（昭18）、藤田勝美先生（昭20）方が科会の整備に努められておられました。この時の会長は初代草刈先生を継いだ第2代阿部源祐さん（昭16）でした。次に小沢甚一郎さん（昭18）、岡田整八さん（昭18）と続き、私は電気工学科在職中、皆様に親しくご指導頂きました。この頃、太田原功先生（昭30）が着任され、共に科会の振興に努めました。第9代会長高木三郎先生（昭17）の後を私が継いだ時、副会長に宮沢賢治の甥である岩田純蔵先生（昭28）と岩手放送の第11代会長山本辰吾さん（昭23）に就いて頂き、誠に心強い思いでした。又、盛岡支部長時代には、草刈先生の盛岡生活を支援された藤村泰造さん（昭23）、岩手県副知事で第16代会長佐々木浩さん（昭23）、同級生で第17代会長細川哲男君（昭24）、岩手県企業局で第19代会長佐々木喜八郎さん（昭28）、一戸研究室で卒業研究の小野寺瑞穂さん（昭29）、岩手県企業局の歳弘健さん（昭33）、現支部長旗福寛先生（昭38）達のご協力で諸行事を楽しく催す事が出来ました。又、柏葉安兵衛先生（昭38）には母校在職中、太田原先生と共に科会本部の立場でご助言ご指導頂きました。それから佐藤淳先生・志田純一先生は東北大学出身で、私にも同年代という事もあり直接種々ご教示下さり、科会には格別のご協力下さり誠に有難いことでした。

国内外でご活躍の会員の皆様にはお家族共々に、益々のご健勝を祈念し、岩手大学・一祐会・科会の更なるご隆昌を祈願致しております。



## 《記念講演会》

演 題 「岩手大学の62年、そして震災と復興」

講 師 岩手大学長 藤井克己先生

### 講師紹介 柏葉安兵衛（電気電子情報科会会長）

先生は昭和28年3月に滋賀県でお生まれになり、昭和52年3月東京大学大学院農学研究科を修了し、その後東京大学助手を経て昭和59年11月に岩手大学農学部講師、平成9年1月に教授、平成17年4月から20年3月まで農学部長、平成20年6月から学長に就任し、現在2期目でございます。専門は土壌環境の物理学、特にそこでのバイオマスや粘土の働きをご研究でございます。学長職のほか、岩手県東日本大震災津波復興委員会委員長、岩手県総合計画審議会会長、(財)岩手産業振興センター理事長など、数々の要職に就いておられます。

### 【講演要旨】

岩手大学電気電子情報科会創立70周年、本当におめでとうございます。今日は、岩手大学の新制大学としての歩みをふまえながら、震災とその後の経過についても触れて参りたいと思います。

岩手大学のキャンパスは、岩手山をバックに緑に囲まれて広大です。一つのキャンパスで全学生がずっと学べ、市街地にある利便性の高い大学というのは、なかなか国立大学としてもありませんので、いろいろなところで宣伝しています。

先ず62年を振り返りたいと思いますが、最初の10年を『草創期』という形で整理致します。これは昭和26年の岩大グラウンドの風景です（写真参照）。今は撤去しましたが、スタンドを建設中です。ここが工学部ですね。新制大学ができて2年後もまだこんな風景だったのです。昭和30年頃にご卒業の方には非常に懐かしいなお思いになる方もおられることと思います。当時は学芸学部、工学部、農学部の3学部で、工学部は1学科30名、機械、電気、金属、鉱山の4学科で120名でした。大学進学率10%未満、エリート期だったと思います。

それからの30年を『発展期』として整理してみました。実際に建物、施設、制度が充実してきました。今の盛岡三高のところにあった学芸学部が、上田キャンパスに昭和36年に移って、全学部全員が1キャンパスでずっと勉強するということがスタートしました。一般教育部が教養部と改称して教育が充実し、学芸学部が教育学部と改称、教養部が人文社会学部に生ま

れ変わりました。工学部は10年たって応用化学科ができ、30年たって10学科、定員400名になりましたし、工学部、農学部には大学院修士課程が設置されました。この間、進学率は上昇して20%台、そして1975年には4割近くになりました。大学は発展しますが、大衆化してきた、マスレベルに達してきたといわれるようになったわけです。

昭和54年には共通一次試験が導入されましたが、それまでは一期校、二期校制でした。一期校は北海道、東北地方では3校だけで、北大、東北大の旧帝大以外では岩手大学だけでした。この重み、存在感は大きなものがありました。共通一次試験で国立大学の入試機会が一回だけになり、国立大学に対する魅力をそぐことになっただけでなく、入試制度をいじりすぎ、入試混乱の時代になって国民のそしりを受けることになりました。当時は「大学が学生を選ぶ」という立場でいることができた時代であったのですが、今は「受験生に大学を選んでいただく」という時代で、完全に主客転倒したといえます。

平成になってからを『展開期』としてとらえると、花開く部分もでてきました。その一つは大学院の充実です。農学部ではドクターコース、人社、教育にはマスターコース、平成8年には工学部にもドクターコースができました。また学部の改組が行われ、工学部は10学科が6学科になりました。平成2年に共通一次から入試センター試験に変わり、大学設置基準の大綱化（H3）によって一般教育と専門科目の区分がなくなり、専門教育中心の教育編成になりました。

21世紀に入って、人材育成における課題

ができました。平成4年ころの18歳人口が200万人、大学進学50万人（その中で国公立12万人）という状況では、大学が求める人材が入学してきたのですが、現在は18歳人口121万人、入学定員60万人（国公立12万人）ですので、当然入学生の資質の多様化、要望のミスマッチができました。農、工へ入ってくる学生の中で、物理、化学、生物をきっちり勉強したという者は少なくなりました。21世紀型の人材育成が危ういところにきていると感じています。エリート期やマス（大衆化）期の人材育成では、岩手大学工学部で十分に教育を受けてその中身を存分に発揮できた世代で、うらやましいことです。ですから同窓会にも思い入れが強いと思います。工業化社会を担う人材育成は、専門家の育成、知識と技術を伝達していくということが、暗黙の了解として企業にも社会にも役所にもありました。しかし、21世紀型の人材育成は変わってきています。脱工業化社会に求められる人材像では、コミュニケーション能力、チームワーク、問題解決能力、責任感、学習持続力が求められています。

7年ほど前に法人化を迎えました。それまで大学としての大きな柱は教育と研究でしたが、3つめの柱として地域連携・産学官連携を重視するようになりました。学生の立場に立った教育サービスを提供することや、研究も地域特性を踏まえた研究をというように変わりましたし、これらへの対応が求められています。

次に東日本大震災とその特徴について述べたいと思います。地震被害より津波被害が圧倒的に深刻で、0か100かというように、被災の差が激しいことです。農林水産業が基盤の地域なので、近隣に雇用の場が少ないことも問題です。

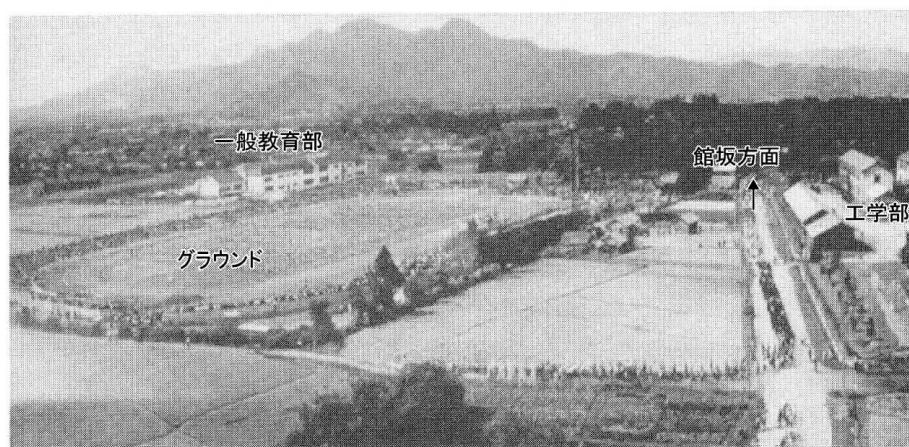
大学進学率は全国平均で50%を超えています。岩手県は全国最低レベルの40%にとどまっています。盛岡では47%ですが、沿岸平均では35%程度です。地理的条件・交通事情、産業構造、社会構造、教育のみならず健康・福祉にも格差が生じていますが、このような格差が震災によってさらに拍車がかかるのが懸念されます。

岩手大学では4月に復興対策本部を立ち上げて多面的に活動しています。岩手大学の復興に関する主な活動は、ボランティア活動、物資支援活動、調査研究活動などです。学生の被災状況は、在学生6000名のうち、家屋の被災者と経済的支援者の被災者を合わせると300名に達します。これらの学生には授業料の免除、さらに入学生に対しては入学料の免除をしました。10月になって復興推進本部を立ち上げ、「岩手の復興と再生に」オール岩大パワーを」ということで、釜石にサテライトを設けて拠点化し、協力していこうと思っています。大きな柱としては生活復興支援、産業復興支援、地域防災拠点形成です。

復興を契機として今こそ地方の国立大として試されどきだと思っています。400名の教員がそれぞれ自分の問題と受け止めて他の方と連携しながら地域と共に復興に向けて歩みたいと思っています。宮沢賢治の「アメニモマケズ」の精神に加えて、「なでしこジャパン」のようなパスワーク・連携が今後の決め手になると考えます。卒業生の皆様からの援助をいただきながら、進んで参りたいと思います。岩手大学は今こそ「岩手の復興と再生」の拠点となって、地域と共に歩む所存です。

本日はどうもありがとうございました。

(文責柏葉)



昭和26年の岩大グラウンド風景

## 《創立 70 周年記念祝賀会開催のご報告》

創立 70 周年記念祝賀会実行委員長 寺井正行  
(昭和 41 年電気卒・東京支部名誉支部長)

平成 23 年 10 月 29 日、東京市ヶ谷のアルカディア市ヶ谷に会員・来賓総勢 173 名（予定参加者 184 名）が集まり、科会の創立 70 周年を盛大に祝った。

13 時 30 分の受付開始・アトラクションから始まり、記念式典・記念講演会・記念撮影に東京支部大会を挟んで 20 時過ぎの記念祝賀会お開きまで、長時間・盛りだくさんの内容だったが、参加会員・実行委員皆様のご協力でスムーズに進行することができた。

祝賀会は、平成 22 年 11 月に東京支部が実行組織となって準備開始して以来約 11 か月、紆余曲折を経ての開催であった。

平成 23 年 3 月発行の「きたかみ」で、創立 70 周年記念事業趣意書を発表し、記念祝賀会への参加・協賛申し込み受け付けを開始したが、会員の手元に届いたのは、3 月 11 日の東日本大震災後の大混乱の最中であった。

実行委員会事務局も仕事現役の方々には本業が激変・超多忙となり、各卒業年次毎の実行委員を募る予定もあったが、準備活動に時間を割いていただくことも憚られて、やむなくしばらくの間事務局活動はリタイヤ組数名で進めざるを得なかった。

はたして、6 月初旬までの参加申込者は 40 名に満たず、科会理事会の設定目標 150 名はおろか 100 名の参加も危ぶまれた。

5 月末に S 28～S 63 卒の各年次毎数名に実行委員就任を依頼して同期の皆さんへのお声かけをお願いし、8 月末に東京支部会員宛の支部大会開催案内でも祝賀会参加を呼びかけた。

ここから参加申込者が急増して、会場を広い部屋に変更するなど、嬉しい悲鳴をあげながら準備に追われた。（賛助金協賛者は 230 名）

実行委員から同期生への連絡・二次会の設定・参加の誘い、などが大きな力になり、あらためて同期会活動の重要性を認識させられた。

祝賀会は準備開始当初から、型どおりの挨拶・乾杯・祝辞だけではなく、科会創立と発展にご苦労された先人・往時を偲び、会員が互いに祝い・楽しめる会にすることを意図していた。

母校の地“岩手”も被災した東日本大震災の後には、被災者の鎮魂も欠かせなかった。

鎮魂は、小野寺瑞穂さんの「ナラの木」の詩の朗読と、二戸の保育園児の「空より高く」の合唱とともに黙祷してその意を表わした。

会員が楽しむ企画としては、アトラクション会場で往時を偲ぶ数々の写真を映し出し、祝宴の中での「さんさ踊り」実演で、初めて見た方にその迫力を実感していただいた。高工・工専時代の二つの「電気科逍遥歌」と同袍寮歌のメロディーを発掘して大合唱することもできた。

これらの模様を記録した DVD・CD や、音楽 CD・記念写真は、昨年中に参加者・協賛者に柏葉会長の開催報告と共にお送りしたが、今号「きたかみ」には再編集した保存版の DVD 1 枚を添付した。楽しんでいただきたい。

思い起こしてみると科会は、対米英開戦による繰上げ卒業や集会・結社禁止というただならぬ状況の中で、電気科卒業生・同期生という“縁”を大切にしている目的で創設されている。

それから 70 年を経ての祝賀会が、想定を越える多数の参加者で盛大に行い得たのは、大地震・巨大津波・原発事故というただならぬ状況の中で岩大電気系卒業生・同期生という“縁”や“絆”を再確認し大切にしようとする心が無意識のうちに作用したようにも思われる。

同窓会活動が学校評価の重要な要素ともなる今日、“縁”や“絆”を大切にしていることを再確認する必要があるのではないだろうか。

一方、祝賀会準備の過程で、図らずも今後の科会活動にとって避けては通れない重要なテーマが見えてきた。今後の参考に記しておく。

1. 今後は、5 年あるいは 10 年ごとの周年記念行事を恒例化しておく必要がある。
2. 科会会員の居住地は、岩手県 30%、宮城+青森 24%、1 都 3 県では 20% である。行事開催地や支部活動に考慮する必要がある。
3. 一祐会 DB より同期会連絡網が有効だった。同期会を科会の基礎組織にする必要がある。

“未曾有の大震災”からの復旧・復興の道筋も定かでない時期での開催であったが、科会の“古希”70 周年を、会員諸兄のご賛同とご協力で楽しく祝い、“縁”を強めることができた。あらためて心から御礼申し上げます。

# 《電気電子情報科会創立 70 周年記念祝賀会》

## ご来賓

藤井 克己	岩手大学長
太田原 功	岩手大学同窓会連合会長
渡邊 喬	岩手大学工学部一祐会会長
恒川 佳隆	学科教授・学科長
藤原 民也	学科教授
三輪 謙二	学科准教授
千葉 茂樹	学科技術専門員

菅原 芳彦	岩手県東京事務所部長
中川 政則	盛岡市東京事務所所長
高橋 孝子	盛岡市東京事務所副所長
松本 正巳	東京金属物性科会会長
中坪 秀彰	きたかみ会会長
小松 一成	東機機会会長(祝賀会欠席)

学科：電気電子・情報システム工学科

## 参加者一覧

S16	阿部源祐	✳○
S19	石川芳郎	△
S23	石井宗典	
S24	山崎時男	✳○
S26	中山 勝	
S28	小笠原芳雄	
	佐々木喜八郎	✳○
	森川孝之	
	吉田登美男	✳◎
	吉田博文	□
S29	小野寺瑞穂	○
	菊池昭雄	□
	瀬野尾澈夫	
S30	太田原 功	○
	高橋 章	
S31	金澤 眞	□
	高田幸雄	△
S33	大木 強	
	小林榮松	
	杉本 務	
	鈴木 誠	□
	津田 等	
S34	天坂 博	
	田中春美	
	長岐芳郎	◎
S35	池田隆夫	
	齊藤敏夫	
	吉田 一郎	
	吉田豊彦	
	萬 八郎	
S37	小森芳則	
	四戸弘道	□
	柴田隆昭	◎
	高杉信男	
	高橋道彰	
S38	橋場弘道	
	吉岡正修	
	稲田 興	□
	遠藤博美	△
	及川二千朗	○
	岡本康之	
	小口文昭	
	柏葉安兵衛	○

S38	齊藤 健	○
	佐藤隆三	
	旗福寛	○
	最上清治郎	
S39	石井幸一	
	斎藤善治	
	風呂 功	□
S40	木下徳幸	□
	久保田 博	□
	佐々木 實	
	田中 豊	
	前川 攻	
S41	松本洋一	□
	薄衣文雄	□
	片倉邦彦	
	棚田靖夫	
	田山典男	△○
S42	寺井正行	◎◎
	牧 一雄	□
	吉田英夫	
	阿部憲治	
	久保田賢二	○
S43	小島宏行	
	佐々木清志	
	佐々木哲彌	△□
	鈴木 武	
	徳田勝子	□
	徳田博明	□
	富田 毅	
	平野忠弘	
	藤村雄治	
	村田稔	
S44	吉野(館)盟吉	
	安田恵一	
	小林靖男	
S45	佐々木良治	○
	高橋正美	□
	平野正一	
S46	武田謙太郎	□
	飛世政和	◎
	篠原正美	□
S47	高橋和幸	□
	永山隆義	

S44	橋本正道	□
	浜野 裕	
	安保 進	
S45	大川憲夫	
	岡山茂久	□
	黒岡恭夫	
	田中行男	□
	柳橋好子	◎◎
S46	石川 修	
	川浪茂樹	
	菊地裕光	
	郡司隆充	
	三浦一司	□
S47	三沢一幸	
	山田順一	
	秋田晋一	□
	小林秀雄	◎
	澤藤隆一	◎◎
S48	下田喜美雄	□
	田中俊博	□
	徳山隆久	□
	成田直正	△
	山田 均	◎
S49	小黒沢利幸	□
	木村直博	
	木村好正	□
	佐藤 裕	
	高橋晴夫	
S50	平賀 勉	
	山口裕	
	斎藤新一	□
	白戸真樹	
	田中健二	□
S51	森 清春	
	和地三男	
	岸田茂久	
	菅 公男	
	工藤裕嗣	□
S52	桜田俊昭	△
	佐藤文人	
	谷本雅之	
	千葉則茂	○
	藤田正道	

S51	秋元洋一	
	加藤公章	
	小磯巖男	□
	桜井 剛	
	松下明博	
S52	渡邊壽夫	
	菊池 茂	
	小堀和昭	
	佐々木幹志	
	在家 宏	◎
S53	鈴木和夫	
	首藤晃一	□
	数藤 崇	
	山内邦夫	
	佐々木 繁	
S54	畠山 主	△
	吉澤和弘	
S55	切田 仁	
	玉田耕一	△
S56	桑島耕太郎	
S57	畠山 寧	
S58	阿部 純	
	大御堂龍也	
	狩野利之	◎
	菊地紀幸	◎
	田口之博	△
S59	立花龍一	○
	長田 洋	◎◎
S60	小笠原清人	
	小峠正男	□
H1	金澤昌幸	
	南野晶彦	
H2	小原敏男	
	富塚秀樹	
H3	木村彰男	◎◎
	遠藤慎介	
H4	加瀬貞二	◎
	中山靖茂	
H5	松高俊文	
	柏葉安宏	
H6	木村 豊	
H7	阿部貴美	

✳: 草刈功劳賞受賞者

○: 70周年記念事業実行委員

◎: 祝賀会事務局

□: 祝賀会実行委員

△: 欠席者

賛助金協賛者一覽

東京	近藤 孝	
S17	関谷道郎	
	高木三郎	⊛
	池野九平	⊛
S18	望月久光	
	小野幹雄	
S19	富田弘平	⊛
	国安章二	
S20	佐々木伸一	
	名久井弥七	
	小笠原義照	
S22	金子恒夫	
	伊藤寅二郎	
S23	小野寺敬夫	
	片方善治	
	菅原順次	
	藤谷晃造	
	藤原昭二	⊛
	松下 宏	
	村上 登	
S24	浦山郁夫	
	景山好夫	
	菊地一夫	
	境田敬三	
	櫻井國雄	
S25	一條昭夫	
	小川 昭	
	後藤裕夫	
S28	和田守之助	
	佐藤 壽	
	高山宗三	
S29	中井昭生	
	小原正三	
S30	田村純一	
	鶴田 惇	
	名久井徳弥	
S31	関 孝雄	□
	関村幸治	
	千葉二郎	
	星 彰	
S32	山瀬憲吾	
	伊藤彰八	
	後藤彰雄	
	小西敬治	
S33	西川 汎	
	山下幸雄	
	小田島巖	
	北島礼三郎	
S34	佐藤文昭	
	高岡 惇	
	山木孝男	
S35	斎藤昇	
	坂本英二	
	鈴木靖夫	
	歳弘 健	
S36	荒川勇治	
	齋藤 弘	
S37	高橋 功	

S34	松本員典	
	横田安令	
	横山一志	
S35	海老名忠夫	
	佐藤一男	□
	渋谷宗一	
	登嶋善隆	
	宮岡日出勝	
S36	吉田武正	
	工藤邦夫	
	瀬尾泰二郎	
	高橋 剛	
S37	渡辺 毅	
	伊藤辰紀	
	江尻弘道	
	大岩洋和	
	小原四郎	
	川越 昭	
S38	佐藤善四郎	
	鈴木祥布	
	高橋敏郎	
	円井英文	
	鶴木慈郎	
S39	照井隆夫	
	新館 杲	
	須山 護	
	経沢勉	
S40	松田一康	
	渡邊 寛	
	工藤泰宏	
	佐々木紘毅	
S41	高田博巳	
	富原喜宜	
	中野俊則	
S42	吉田 弘	
	山田鐵夫	
	井上隆志	
	黒澤 昭	
S43	谷川嘉昭	
	深井康平	
	吉崎紘一	
S44	青木英典	
	大西克駿	
	片桐明典	
	神尾孝志	
S45	藺部峯元	
	守屋文夫	
	結城秀朗	
	伊藤 高	
S46	太田栄太	
	長利亘勝	
	小野寺篤夫	
	加賀谷功	
S47	菊池昌平	
	佐々木範房	
	篠谷一丸	□
S48	鈴木康彦	
	谷黒文彌	

S43	川村邦光	
	京極 勉	
	熊谷寛人	
	森 忠之	
S44	八重樫純樹	
	国吉克哉	
	小南 毅	
	北城好文	
	宮手敏雄	
S45	山下瑞穂	
	相澤哲也	
	内川達三	
	金田博臣	
S46	薦田二夫	
	南幅留男	
	小森文雄	
S47	千田 充	
	本多修一	
	伊藤正悦	
	小笠原広志	
	兼平栄補	
	栗林周平	
S48	小池康治	
	杉本彰男	
	對馬省次	
S49	中村博美	
	八嶋 茂	
	安田喜一	
	金田重憲	
S50	参沢幸夫	
	芳賀由紀夫	
S51	荻野泰男	
	加藤一郎	
	小松 光	
S52	杉村洋一	
	瀬谷正二	
	中村雅則	
	五十嵐明	
S53	長岡勝衛	
	中田耕治	
	大森康司	
S54	小池保典	
	田中光弘	
	麻生純一	
	今川善信	
S55	中村英男	
	程内安彦	
	室井秀文	
	八木金寿	
S56	矢沢正次	
	伊藤悦充	
	小野繁	
	工藤義昭	
S57	椎名繁夫	
	堤 良作	
	村山政実	
S58	渡辺俊彦	
	伊藤博司	

S54	大道寺重俊	
	川崎恭正	
	小玉俊文	
S55	田代良二	
	山内利明	◎
S56	奥田雅恵	□
	穴戸 諭	
	田村由和	
	鳥谷部達雄	
S57	藤谷武史	
	水原明彦	
	鎌田真人	
S58	佐藤 俊	
	竹内一之	
S59	本郷節之	
	高木眞一郎	
	大澤 崇	
S60	大槻光夫	
	小野田隆士	
	仁井田桂子	
	加藤隆二	
S61	濱木浩継	
	松岡弘明	
	森 一	
	飯村早苗	
S62	伊藤和彦	
	工藤英明	
	鈴木芳喜	
S63	藤井義博	
	安田威彦	
H1	山内雅古	
H2	鈴木研一	
	菅原智明	
	米山直樹	
H3	遠藤克巳	
	阿部多津也	
H4	兒玉広記	
	駒込祥二	
H6	佐藤 修	
	寺田和義	
H8	小野文明	
H9	横田 求	
	千葉 史	
H11	土肥礼樹	
	内山和義	
H12	附田隆幸	
	高橋勇二	
H13	徳田玄明	
	菅原志郎	
H14	徳田玄明	
	冲田好広	
	菅原栄一	
H16	高橋 賢	
	林 宏明	
	松田 潤	

⊛: 草刈功劳賞受賞者    ○: 70周年記念事業実行委員    ◎: 祝賀会事務局    □: 祝賀会実行委員

## 《思い出の歌》 歌い継ぐ思い》

創立50周年記念誌「炎」に、鈴木辰三さん(S23)の「アイオン台風と電気科逍遥歌」という一文がある。

盛岡高専時代に電気科逍遥歌が作られた経緯・楽譜・歌詞を「炎」に載せようとして作詞・作曲の佐藤典博さん(S23)にも再三問い合わせたが、楽譜は見つからず、新たな採譜も出来なかった、と書かれている。

6番までである歌詞は、旧制高校時代の他校のものとは比べても遜色無いどころか秀逸の詩だと思ひ、かねてメロディーを聴いてみたいものと思っていたが、機会がなかった。

創立70周年記念祝賀会実行委員長を仰せつかったこの機会に、往時の愛唱歌を掘り起こし祝賀会で大合唱して、永く歌い継ぐ契機にしたと考えた。

記念事業実行委員会で、この話をしたら、仙台の齊藤健さん(S38)から、境田敬三さん(S24)が歌っているCDをいただき、初めてこのメロディーを聴いた。

往時を彷彿とさせ心に沁みる、素晴らしいメロディーに感激した。

盛岡高等工業学校時代にも別の逍遥歌があって「炎」には関谷道郎さん(S17)の「歌詞集ノートより」として掲載されている。このことを、2011年の科会総会の際に話していたら、山崎

時男さん(S24)が今でも歌えるとのこと、持っていたデジカメで録音させていただいた。

佐々木喜八郎さん(S28)からは、同袍寮歌の作曲者である田中考四郎さん(16・工作機械)が、還暦記念に作成したソノシートをいただいた。

見ると1940年作曲、1974年編曲、と記されていた。一祐会に伝わる楽譜は、学生時代に聴き覚えたメロディーとは違っていることが長年の疑問であった。ソノシートで編曲後のメロディーを聴くと、歌い継がれ、聴き覚えたあのメロディーであった。

長年の疑問解消であるが、新たな疑問が残った。

1960年代の在学生在が、なぜ1974年編曲後のメロディーを歌っていたのだろうか？

学生歌は、井上隆志さん(S40)からプロが録音したCDをいただいた。

逍遥歌と同袍寮歌は、採譜して音楽ソフトで演奏させた。これらの作業には、根本宏一さん(S41)に助言いただいた。

多くの方々の助けをいただいて、CDに纏め、記念DVDと共に祝賀会参加者・賛助金協賛者にお送りすることができ、創立70周年が、東日本大震災共々忘れられない年になった。

これらの歌を「岩手大学遺産」として、多くの方に語り継ぎ・歌い継いでいただきたいと願っている。

寺井 正行(電気S41) 記

### 盛岡高等工業学校 電気科逍遥歌

作詞・作曲：不詳

♩=80



と りょう が お か の う えだ の お か に



は る か ぜ ぶ い て た か ま つ の



い け も に う か ぶ さ くら ば な



あ あ せ い し ゅ ん の か を あ び て



つ どう ろ っ び ぐ こ う こ う け ん じ

1. 杜陵が丘の上田の原に 春風吹きて高松の  
池面に吹雪く桜花 噫々青春の香をあびて  
集う六百高工健児
2. 白雲悠々姫神山の 高嶺を競いおしよせる  
その意気持ちて進みゆく 噫々初春の日をうけて  
顔にほほえむ電気科生徒
3. 清水南に流れ去る 北上川を逆上り  
昔を想う電気科生徒 噫々夕暮れの鳥鳴く  
杉の木知るや古戦場
4. 燃え立つ希望胸に秘め 青葉の峰をかけめぐり  
噫々白銀に輝きて 仰げば高き岩手山  
その経し年はいくばこそ
5. 暮秋の夜月青白く 庭の木寒く照り映えば  
何処で歌う故郷の歌 噫々その声はしんしんと  
心に響き胸を蝕む

♪メロディーは山崎時男さんの歌から採譜した。

♪歌詞は「炎」の関谷道郎さん(S17)の記事を転載した。

## 盛岡工業専門学校 電気科逍遥歌

作詞・作曲：佐藤典博氏（専門7回・S23）

♩=77

はなりょうらん の はるしがつ

おぼろつきか げ たかきよわ

いのちのうたげ いま はてて

こけいし ずかに さすらわん

1. 花繚乱の春四月 朧月影高き夜半  
命の宴今果てて 孤影静かに流離わん
2. 不来方城に佇めば 石垣青く苔むしぬ  
流るる水は千載に 昔の夢を語るなれ
3. 北斗輝くみちのくの 空にかかれる南部富士  
ああ玲瓏のその姿 静かに胸に迫り来る
4. 地に咲く花はうつろえど 北の学舎の若人の  
理想の花は永久に 匂い豊かに馨るなれ
5. 自主の剣をかざしつつ 胸打ち進む若人の  
自由の唄は高らかに 聳ゆる山に聳する
6. ああ青春よ若人よ 汲みても尽きぬ海原の  
潮の如き先哲の 真理の海に船出せん

♪メロディーは境田敏三さんの歌から採譜した。

♪歌詞は「炎」の鈴木辰三さん(S23)の記事を転載した。

## 同袍寮歌

作詞：田口経恭氏（S16・機械）<1941年> 作曲：田中孝四郎氏（S16・工作機械）<1941年> 編曲：同左<1974年>

♩=84

れいろ そびゆる みちのくのなん

ぶふよを あおぐとこみ

なもととおききたかみの

ゆしはうかぶ どほおりょう

くおんののぞみに つどいよる われ

らけんじの いきたかし

1. 玲瓏聳ゆる陸奥の  
南部芙蓉を仰ぐとこ  
源遠き北上に  
雄姿は浮ぶ同袍寮  
久遠の希望に集い寄る  
我等健児の意気高し
2. 澎湃寄する海原の  
怒涛逆まく世に生まれ  
科学の使命双肩に  
研鑽の道とつとつと  
鍛え磨かん四年を  
いざ漕ぎゆかん諸共に
3. 上田の丘にそそり立つ  
常磐の松のとこしえに  
淳美の誉れ燦然と  
暁名香る同袍寮  
光栄ある伝統打ち立てん  
雄々しく励め我が健児

♪メロディーは田中孝四郎さんの歌から採譜した。

♪歌詞は「一祐会会員名簿」から転載した。



## —退職した先生からの寄稿—

### 岩手大学工学部に在職して

馬場 守



電気電子情報科会員の皆様には、平成24年の新しい年を迎えてご健勝のこととお喜び申し上げます。

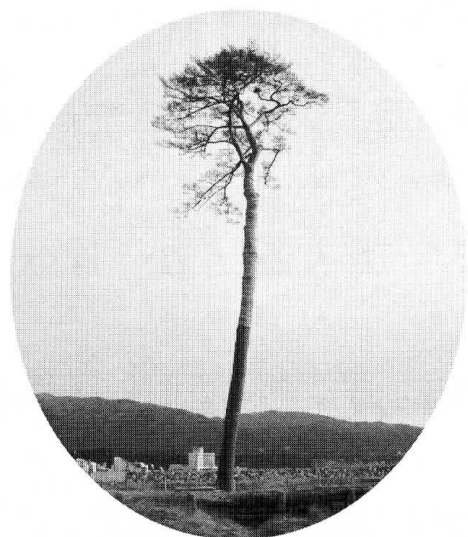
私は昨年3月末に岩手大学工学部を退職しまし

た。昭和51年11月に当時の電子工学科に着任しましたので、34年余の間、電子工学科、電気電子工学科そして現在の電気電子・情報システム工学科で教育研究に従事して参りました。無事に退職を迎えることができましたことに対して、会員卒業生の皆さまと教職員の皆さまに改めてお礼を申し上げたいと思います。

在職時を振り返ると、赴任当時の出来事よりも先ず、昨年3月に起きた東日本大震災に関わる諸々のことが、記憶というよりも、いまだ現在進行形で私の脳裏に鮮明にあり続けています。これまでの地質学的歴史の中で数百年に1度、千年に1度しか観測されていないマグニチュード9クラスの巨大地震が、私のほんの数十年の勤務時の最終月に起きたことに思いを馳せないわけには参りません。この度の東日本大震災は、大地震と大津波そして原子力発電所の大事故が、同時的かつ重層的に起きた大災害で、過去に例を見ない甚大な被害をもたらしました。会員の皆さま、あるいは皆さまの親戚・知人の方で直接あるいは間接に被災を受けられた方がおられましたら、紙面をお借りして謹んで

お見舞いを申し上げます。また、亡くなられた方々といまだ行方不明のたくさんの方々の「無念さと尊い志」を会員の皆様と共に引き継いで参りたいと思います。

三陸海岸の景勝の一つであった「高田の松原」が一瞬にしてなぎ倒されました。一変した茫漠たる景色の中に1木だけ生き残った姿は象徴的でした。7万本の群生した松林の中で、なぜ数十本でもなく、皆無でもなく、1本だけが傾くこともなく凛と気高く立ち堪えたのか。「無念さと尊い志」を一身に背負った奇跡の松の姿を目の当たりにし、また、猛り狂った計り知れない自然のエネルギーに打ち碎かれた最先端技術の原子力発電所の無残な姿を映像で目にして、自然がひとたび猛り狂えばそのエネルギー量は計り知れないほど莫大であること、人工科学の最先端技術もひとたびコントロール



奇跡の一本松



を失えば、何十年、何百年の先までマイナスの影響の及ぶ懸念があるということ突き付けられました。会員の皆さま、とくに若いエンジニアの皆さまには、「自然と如何に共生すべきか、人にやさしい工学技術とは何か」を常に考え方のベースにおいて、日々の仕事を通して日本の産業と経済の活性化そして中・長期的な視点に立った震災復興の後方支援にご尽力頂くことを祈念しています。

赴任して5、6年が経過して、ようやく教育研究のお手伝いが形をなしてきた頃、当時の研究成果を発表すべく、池田俊夫先生（電子工学科と電子電気工学科に在職）に同行して、旧ソ連邦内のラトビア共和国の首都リガで開催された国際会議に参加しました。学会が開催された1981年は、まだベルリンの壁の崩壊やソ連邦の崩壊の10年ほど前でしたが、当時の冷戦構造の最中、クレムリンの統制下にあったモスクワやレニングラードの表情と、ヨーロッパ的な香りも感じ取れたりリガでの街並みと人々の表情などが今思い出されます。それから約30年を経た現在を振り返って、世界は大きく変化したことを実感します。私にとって最初の外国の訪問国であるラトビア共和国は独立し、ソ連邦はロシア共和国を筆頭に12カ国の国々に分割されました（1991年）。ベルリンの壁も取り払われ（1989年）、旧共産圏に属していた国々が欧州連合EUに合流しました。世界経済におけるアジアの台頭も著しく、昨年2011年には中国が世界第2の経済大国に躍り出ました。最近の新聞・テレビでは、TPPなどの経済圏域のせめぎ合いのニュースが賑わっています。中東・

アフリカの政治・社会状況も激変の真ただ中にありますし、今年は、世界の主要な国々の最高権力者の交代も予定されています。

このような激動する世界の中で、わが国が立ち行くためには、国や自治体、企業などの大きな組織の政策や企業戦略も不可欠ですが、それぞれのもち場で仕事をされているエンジニアの皆さんが高い志をもって、震災復興の後方支援や企業活動に力を発揮して頂くことを祈念しますとともに、若い人材の育成教育にあたっている当学科の教職員の皆さまには、今後とも優秀で逞しい人材の養成にご尽力頂くことを祈念して、退職した教員からのご挨拶とさせていただきます。

在職時の先輩教員で大学時代の恩師でもあるわが尊敬すべき池田俊夫先生とは1年ほど前にお別れしました（前号「きたかみ」）。ほぼ時を同じくして、当学科を無事に“卒業”させて頂いたのも何かのご縁と思います。重ねて、会員の皆様に感謝申し上げますとともに、電気電子情報科会の益々のご発展と会員の皆様のご健勝とご活躍をお祈り致します。



ラトビア大学附属固体物理研究所玄関前でDr. Lushchikと筆者(左写真)  
国際会議会場近くの公園(リガ)で憩う池田俊夫先生(右写真)

# 電気電子工学コースの近況

電気電子・情報システム工学科 電気電子工学コース長 恒 川 佳 隆

電気電子情報科会会員の皆様におかれましては益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

昨年3月11日の東日本大震災では、多くの尊い命が奪われました。当学科でも将来を嘱望されていた一人の学生が津波の犠牲になり、何よりも無念でなりません。亡くなられた学生に対して心よりご冥福をお祈りいたします。

今年度も本学科を卒業された方々を講師にお招きし、豊富な経験を基に通常の講義では網羅できない話題内容を含む特別講義を実施致しました。池田隆夫氏（昭和35年3月電気卒）、澤藤隆一氏（昭和47年3月電気卒）、齋藤新一氏（昭和49年3月電気卒）、田中健二氏（昭和49年3月電子卒）の皆様には大変興味深いご講演をいただきました。これから社会に飛び立つ学生にとって大変有意義な講義となっています。今後とも、卒業生の皆様には特別講義に関するご支援をお願い致します。

毎年実施しております首都圏方面への3年次学生の工場見学では、今年度は(株)東芝浜川崎工場、(株)NTTドコモ R&Dセンタ、富士通(株)川崎工場、(株)フジクラ佐倉事業所を見学してきました。また、県内企業の工場見学としては、岩手東芝エレクトロニクス(株)および東京エレクトロン東北(株)を見学してきました。各企業では本学科卒業生から心温まるお世話をいただきました。心より御礼申し上げますとともに、今後ともご支援をお願い致します。

人事面では、平成23年3月に薄膜リチウムイオン二次電池などの分野で優れた研究業績を残された馬場守教授が定年退職され、岩手県立産業技術短期大学の校長に着任されています。先生の長年の教育と研究に対する功績に敬意を表します。8月には高橋和貴助教がオーストラリア国立大学の長期学外研修から帰国しました。10月には高木浩一先生が教授に昇任されました。これまでの、高電圧プラズマの農業および環境応用に関する研究に加えて、エネルギー環境学習などでも活躍が期待されています。

学生も活発に研究活動を行っており、毎年多

くの賞を受賞しています。今年も、大学院生が電気学会の優秀論文発表賞を、またIEEE仙台支部学生賞「The Encouragement Prize」を受賞しました。さらに、ETロボコン2011東北地区リベンジ大会において、岩手大学工学部電気電子・情報システム工学科チームが3位に入賞しました。

教員も毎年のように学会賞を受賞していますが、今年度高橋和貴助教が文部科学大臣表彰若手科学者賞と日本物理学会若手奨励賞を受賞するなど、国内外からも高く評価されています。また、岡英夫教授が電気学会の最優秀技術活動賞（技術報告賞）を受賞しました。これは長年の研究業績に対して贈られたものです。

2008年に起きたリーマンショックの余波から、日本経済はいまだ脱し切れていない状況にあり、雇用状況の低迷が続いております。就職氷河期と言われる昨今にあって、当コースでは100社を超える企業からご来訪いただき、また400社を超える企業からご推薦をいただきました。その結果、就職を希望する学生に対してはほぼ全員が内定しています。これも会員の皆様がこれまで築いてこられた高い評価のお陰であり、衷心よりお礼申し上げる次第です。

今回の大震災では、地震、津波ばかりでなく福島原発事故による放射能漏れが深刻な問題を引き起こし、今後のエネルギー政策に関心が集まっています。その対策の1つとして、スマートグリッドと言われる高度な情報通信技術（ICT）を用いた次世代送電網の活用などが言われています。同時に、風力発電や太陽光発電などの再生可能エネルギーの活用も重要となってきます。したがって、東日本大震災の復興には電気・電子・通信・情報の分野が今後益々重要な技術となってきます。当学科では、それらの期待に応えうる専門基礎学力と柔軟な課題解決能力をもった人材を育成すべく、教職員一同一層の努力をしております。会員の皆様には、今後ともなお一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

# 情報システム工学コースの近況

電気電子・情報システム工学科 情報システム工学コース長 西山 清

電気電子情報科会会員の皆様におかれましては益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、情報システム工学科と電気電子工学科が合併して3年が経ちました。合併に際しては、数学とプログラミングを中心とした情報システム工学科と物理学を中心とした電気電子工学科の間の調整は難航し、特に入試科目やカリキュラム編成では苦労をいたしました。現在は四十数名の学科会議にも慣れて、それぞれのコースの特徴を尊重しつつ良好な関係を保っています。

入試状況ですが、合併後は比較的安定に倍率が推移しています。合併初年度は久々に前期個別学力検査の受験倍率が2倍を超え、今年度の推薦入試も2.4倍となりました。また、昨年3月11日の大震災を受け、被災者特別選抜を実施し、合格者を複数名だすことができました。

最近では、高校への出前講義も盛況であり、今年度は、青森県立三本木高校、釜石高校、仙台南高校に出向き講義を行いました。また、8月と10月のオープンキャンパスの他にも、随時高校からの見学を受け入れております。

システム理工学系講演会では、京都工芸繊維大学の粟辻安浩教授に「3次元デジタル動画ホログラフィーと超並列データ処理」に関する講演をして頂きました。

今年度の就職状況ですが、リーマンショック以来、特に金融系のシステムエンジニアなどの需要が急速に落ち込み、学生の内定率が下がっています。併せて、超円高による企業のグローバル化もあり、留学生の需要が高まる反面、日本人学生は厳選される傾向が続き、ある一定の基準以下の学生の内定が厳しくなっています。この傾向は今後とも続くものと思われ、事実、学部学生の一部では就職の内定が得られぬまま卒業する学生が出始めています。

教育面では、工学入門科目（数学、物理など）が強化され、学生の基礎学力の底上げに期待が掛っています。また、コンピュータネットワーク実験やシステム設計に関する講義も整備されてきています。

研究面では、科学研究補助費や外部資金の獲

得も活発になっており、受賞や学術交流も増えています。

## 1. 受賞

木下勉、村木祐太、松山克胤、今野晃市：トリム曲面を用いた土器の欠落形状の表現方法、第27回 NICOGRAPH 論文コンテスト論文集、CD-ROM、9月5-6日、最優秀論文賞受賞(2011)

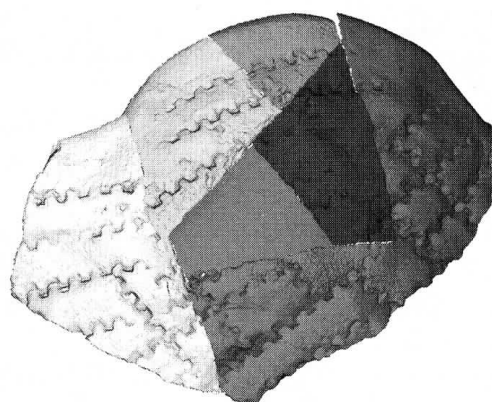
## 2. 学術交流

「平成23年度日本学生支援機構帰国外国人留学生短期研究制度」に採択され、西北農林科技大学情報工程学院張志毅副教授を約2ヶ月間招聘して、デザイン・メディア工学専攻の教員を中心に研究交流を行いました。

人事では、国立大学の法人化の激動の中、情報工学科、情報システム工学科、電気電子・情報システム工学科において常に中心的な役割を果たされた渡邊孝志教授が平成23年度をもちまして定年退職されます。

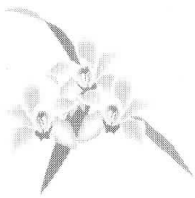
震災関係では、財団や企業からの寄付による学生への奨学金が学内で設立されています。また、カワイサウンド技術・音楽振興財団から被災地の研究者として西山が研究助成を受けました。

最後に、情報システム工学コース一同一丸となって、社会が求める人材育成により一層の努力を重ねて行く所存でおります。会員の皆様には益々のご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

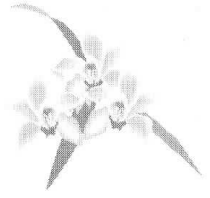


土器の欠落形状表現

(NICOGRAPH 最優秀論文賞受賞)



## 第8回（平成22年度）草刈賞受賞者



### 「草刈賞を受賞して」

情報システム工学科 佐藤 真麻



草刈賞を昨年頂き光栄に思う気持ちでいっぱいです。私は大学4年間、2つのサークルに所属していました。1つはESS (English Speaking Society) という、英語を学ぶサークルです。英会話やTOEICの勉強も

行いますが、岩手大学で毎年行われている不来方祭で英語劇を上演するのが一番の大イベントです。私は、部長としてESSをまとめ、英語劇を成功させるために努力してきました。ESSに入っていたことで、国際交流もできましたし、部長という立場で、責任感や仲間と協力することの大切さを学びました。

2つ目は、ボランティアサークル朔風です。障がい者の子供たちが安全に遊べるような企画

を作成し、2泊3日でキャンプやスキーに行くというものです。このサークルは岩手大学だけでなく、他大学、社会人の方も参加できるサークルだったため、たくさんの人と関わりを持つことができましたし、障がいを持った子供たちと一緒にいることで、普段の生活では体験できないことやたくさんの方の優しさに触れ合うことができました。

現在、私は本大学の大学院に進学し、日々研究を進めています。学部生時代には味わえなかった、迫りくる焦りやプレッシャーを抱えながら毎日を過ごしています。学生生活、最後の残りの力を振り絞って、研究活動に励みつつ、残りの大学生活をいかに有意義に、そして満足のいく生活を送っていけるかという課題を自分自身に掲げながら生活していきたいと思いません。

### 「草刈賞を受賞して」

情報システム工学科 高橋 佳寿子



草刈賞を受賞して一年が経とうとしています。受賞したときは自分の活動でこのような賞をいただけたと思っていませんでしたので、光栄に思うと同時に驚いた記憶があります。

私の受賞理由である「ボート競技」は、あまり馴染みがないものかもしれません。簡単に言えば屋外競技で人間だけではなく天候・風をも相手にし、体力だけでなくリギングと呼ばれる船の調整をする技術、レースを制するための戦略も必要とされるスポーツです。

高校・大学と漕艇部に所属し、大会の運営に関わっていく中で協会の方からお誘いを受け、審判員としても大会に参加させていただいて

ます。普段の環境とは違い様々な地域・年代・職種の方とお話ができ、刺激を受け自分の視野を広げる良い機会となっています。

正直なところ、自分の好きな事をしていただけで賞をいただいているのかという思いもありました。日頃支えてくれている家族、チームメイト、監督、ボート協会などたくさんの方々の存在あってこそこの受賞です。これを励みに、今後もボート競技の発展に協力していければと思います。

現在は岩手大学大学院に進学し、日々研究に励んでいます。院生としての生活も早いもので残り半分となりました。去年は様々な出来事があった一年でした。そんな中で学業に励めることに感謝しながら、残りの学生生活を有意義に過ごしていきたいです。

# 一 草刈賞 一

## 《草刈賞の由来》

盛岡高等工業学校電気科ならびに盛岡工業専門学校電気科卒業生（全10回の卒業生）、岩手大学工学部電気工学科、同電子工学科において、草刈先生の教えを受けた昭和45年3月までの卒業生、並びに岩手大学工学部電気工学科、電子工学科教職員としてご薫陶頂いた教職員、以上の有志約90名が相はかり、「草刈先生ご生誕100年記念事業実行委員会」を組織して上記の卒業生と教職員約1000名に呼びかけて募金活動を行い、成就した事業の一つである。

## 《草刈賞の趣旨》

草刈先生は旧電気工学科を中心として、岩手大学の基礎を築かれた方である。先生のご業績を称え、後世にその教えを伝えるために、電気電子工学科ならびに、情報システム工学科卒業生の中から、意欲的な学生生活を送り後輩の模範となる学生に草刈賞を授与することによって、学部学生の向学心を啓発することを旨とする。



草刈メダルと賞状

## 草刈賞充実のためのご寄付歓迎

草刈賞授与の予定期間は、平成16年度から約10年間でした。

佐藤淳先生のご寄付等により、当初計画が延長できておりますが、いずれ原資が無くなりますので、鋭意検討の結果、経常費の積み立てにより平成40年度までの継続を決定いたしました。

しかしながら、経常費が科会基金を取り崩している現状です。その中で草刈賞継続を支えるために、会員各位の年会費納入をお願いいたします。

さらに、草刈賞に対する自発的なご寄付を大歓迎いたします。

本年度、故 池田俊夫先生のご家族

小野幹雄氏（昭和19年電気卒）

池田隆夫氏（昭和35年電気卒）

の皆さまより、多大なご寄付を頂戴いたしました。

心より感謝申し上げます。

## 平成 23 年度東京支部報告

東京支部長 澤 藤 隆 一 (昭和 47 年電気卒)

東京支部の活動を紹介するホームページは楽  
天の運営する infoseek という有料サイトです  
が本年 5 月をもってサービス終了となります。  
そこでレンタルサーバーとしては国内で No.1 ク  
ラスの人気を誇る「ロリポップ」に引越する  
ことに致しました。容量が大きくなり、写真画  
像がたくさん載せられます。IUEEITOKYO と  
インターネット検索エンジンで入力して下さい。

2011 年は歴史に残る年になりました。リー  
マンショック後の世界同時不況からやっと立ち  
直る気配が見えていたところに 3.11 の東日本  
大震災、そして EU 諸国でのソブリンリスクの  
顕在化が再び世界全体の経済危機を招き、恐慌  
へと繋がる恐れが言われています。更にタイで  
の大洪水が日本製造業に追い討ちをかけ、政治  
的にはどうしようもない状況になっています。

そしてなんとと言ってもビッグイベントは科  
会創立 70 周年記念事業の中の祝賀会でした。  
2010 年秋から準備を進め、東京支部はかつて  
経験したことの無い度重なる準備会合と作業を  
進めました。その過程で起きた東日本大震災の  
あまりの惨状に、祝賀会などという雰囲気が消  
し飛び、4 ヶ月活動停止した後、むしろ被災地  
を励ます意味でもこのイベントを成功させるべ  
きだ、と気を取り直して、寺井正行祝賀会実行  
委員長を中心として猛烈且つ周到な準備と会員  
への参加呼び掛けの結果、10 月 29 日(土)の  
アルカディア市ヶ谷は、会場に入り切らない事  
を心配するほどの参加者となり、大成功だった  
と考えます。同日の東京支部大会では役員全員  
が改選期ではないため全員留任となりました。

科会では 1992 年の電気科会創立 50 周年記念  
行事が盛岡で行われ、ホテルメトロポリタン  
盛岡での祝賀会は 260 名もの大盛会、2002 年  
に草刈遜先生ご生誕 100 年記念事業実行委員会  
が設置され、翌年仙台輪王寺での追悼供養とホ  
テルメトロポリタン仙台での思い出を語る会に

123 名の参加、このときの 399 名の方々からの  
寄付で草刈賞が創設されました。70 周年を祝  
おうという企画時、本来 2012 年 1 月 1 日です  
が、1 ヶ月前倒し、東京で開催してくれという  
本部の意向でした。引き受けるに当っては東京  
支部内で紆余曲折がありました。何と言っても  
50 周年のときはバブル絶頂期、当時のような  
参加者数は望めない中、183 名の参加を得まし  
た。次は 75 周年が見据えられます。スリーク  
オータなので、アニバーサリーとしては 70 周  
年より意義深い節目です。

70 周年記念事業  
の一環で科会運営  
に貢献大の方に「草  
刈功労賞」を贈る  
ことになり、東京  
支部から富田弘平  
氏 (S19 専 4)、高見  
澤敏夫氏 (S20 専 5)、  
吉田登美男氏 (S28  
大 1) の 3 名の方が



対象になりました。ところが高見澤氏は 2000  
年にご逝去されていたことがわかり、富田弘平  
元支部長は賞の楯をお送りしたところで 2011  
年 12 月にご逝去されたことがわかりました。  
また東京支部における工専卒の世話役であった  
萬 藤五郎氏 (S23 専 7) も 2011 年 5 月に逝去さ  
れました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

一祐会傘下の東京地区の 3 支部とは相互交流  
しており、その総会の模様をホームページで紹  
介しておりますが、東京金属物性科会と東機  
会の総会は中止、きたかみ会だけ行われました。  
岩手大学東京事務所と、大学が連携している盛  
岡市の東京事務所が日比谷市政会館に移転しま  
した。震災復興支援として岩手県や盛岡広域 8  
市町村のイベント等をホームページで紹介し、  
会員への情報提供に努めました。

## 《支部だより》

# 平成 23 年度仙台支部報告

新年会は、平成 23 年 1 月 27 日（土）16 時からハーネル仙台において開催されました。年始にあたり各人の抱負、仙台支部の活性化策などを話題に盛り上がりました。

長寿者を祝う会（第 4 回）は、専門 10 回から電気 3 回の皆様をお迎えして、4 月 23 日（土）に開催する予定で諸準備を進めました。しかし、3 月 11 日の東日本大震災の影響により延期することとなりました。

仙台支部総会は、平成 23 年 6 月 25 日（土）14 時 30 分からハーネル仙台において開催されました。総会は、千葉副支部長の司会で、本部から柏葉会長を迎え、支部会員 29 名の出席により開会しました。佐々木支部長の挨拶および来賓の柏葉会長の挨拶の後、平成 22 年度事業報告・決算報告・会計監査報告、平成 23 年度事業計画・予算について審議され、これらが承認されました。

総会に引続き、柏葉理事（平成 9 年電気電子卒）より「コンピュータ・リテラシーからみる

仙台支部長 佐々木 良 治（昭和 43 年電気卒）

世代の違い」と題して、仙台高等専門学校の学生のコンピュータ事情についてお話をいただきました。

懇親会は、数藤副支部長の司会で、まず岩手大学学生歌を斉唱し、来賓の情報システム工学コース長の西山教授より最近の岩手大学事情についてのお話をいただきました。乾杯の後の懇談では、震災後の会員相互の無事の確認、家屋被害の程度および長期間混乱した生活状況などに話題が集中しました。また、東京支部の柴田副支部長には、70 周年記念事業の準備状況などをお話していただきました。

活性化事業として、平成 23 年 10 月 8 日（土）表千家教授千葉宗浄氏（昭和 40 年卒）のご好意で茶事体験会を開催しました。今回は秋晴れのさわやかな天気にも恵まれて、濃茶・懐石・薄茶と続くお茶会の醍醐味を満喫しました。千葉家の皆様方どうもありがとうございました。

以上



平成 23 年度 岩手大学電気電子情報科会 仙台支部総会

平成 23 年 6 月 25 日 ハーネル仙台

## 平成 23 年度盛岡支部報告

本科会の会員は、盛岡市とその周辺に 250 名ぐらいは在住していると思われていますが総会等の各種行事に参加あるいは返事を下さる方は 40～50 名程度です。特に 20 歳代から 40 歳代の方々は実際に居住されているかどうかの確認がなかなか取れません。新幹線では盛岡から一関や八戸まで 30 分程度です。在来線でも花巻、北上まで 30 分程度ですから盛岡支部の行事案内もその辺まで拡張してもよいのではないかと考えております。

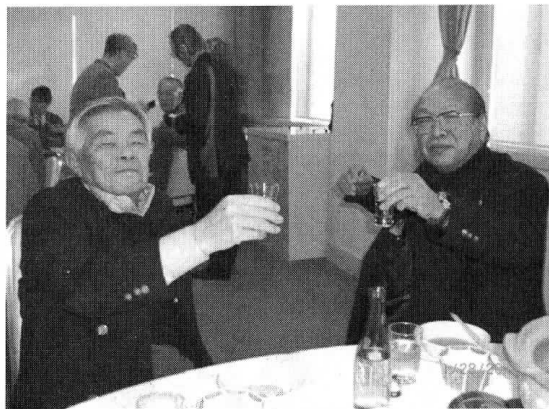
さて、平成 24 年 盛岡支部新年会は平成 24 年 1 月 28 日(土)午後 3 時より大沢川原の岩手労働福祉会館において参加者 24 名で行われました。役員会や新年会は昨年までは大沢川原の国保会館で開催していましたが国保会館の業務縮小のため科会の会合は労働福祉会館に変更しました。同じ大沢川原ですが駅からは 300 m ほど

盛岡支部長 簇 福 寛 (昭和 38 年電気卒)

遠くなりました。

新年会は柏葉会長の挨拶に次いで、厳寒の中、仙台からお出でいただいた阿部源祐(高専 1 回 昭和 16 年卒) 大先輩に乾杯をお願いしました。また新年会は前年に退官された先生をお招きし感謝と慰労の会としております。今年は馬場守先生でしたがご都合でご欠席でした。会が盛り上がったところで 70 周年記念事業の実行委員長の寺井さんが記念式典の CD から盛岡高専電気科の逍遥歌を流したところ会場から逍遥歌とは何ぞやという疑問が寄せられました。CD でも歌っておられる山崎時男さん(昭和 24 年卒)が歌いながらその由来の解説がありました。最後に柳橋好子副会長(昭和 45 年卒)の閉会の辞でお開きとなりました。今年は役員改選の年です。来年は新たな役員のもとで参加者を増やしたいものです。

### 新年会の様子





## 平成 23 年度電気電子情報科会総会

平成 23 年度総会は、平成 23 年 6 月 11 日（土）に開催されました。

昨年まで利用していた岩手国保会館の利用減による営業中止によって、会場を岩手労働福祉会館に移しての開催でした。

電気 62 年卒長田理事の司会で始まり、会長の挨拶では 3 月 11 日の東日本大震災で電気の学生が犠牲になったこと、盛岡でも停電で困ったことなどに話が及び、出席者全員で黙とうを捧げました。

電気電子・情報システム工学科長恒川佳隆教授から祝辞を頂戴しました。また学科の近況として震災で一カ月遅れの授業開始だったことや、実家が流された学生の支援をしていくこと、入試の倍率が低くて課題となっていることなどをお話していただきました。

議長は電気 41 年卒の武田寿郎氏、書記に情報 61 年卒立花龍一理事と情報平成 3 年卒木村彰男理事が選任され、ほぼ原案通り承認、可決されました。

今年度の事業のメインとなる 70 周年記念事業の予算が計上され、「きたかみ」も 70 周年記念事業特集号として増頁することも承認されました。

総会特別講演は、前仙台支部長で電気 38 年卒の齊藤健氏が「公衆電気通信サービスの進展とそのもたらすもの」と題して NTT で培った技術やその移り変わりなどを話され、出席者に共感と感動を与えました。

その後の懇親会は、東京から参加した方々や受付を手伝ってくれた学生たちと、70 周年の話などに花が咲きました。



平成23年度 岩手大学電気電子情報科会総会

平成23年6月11日 労働福祉会館

# －平成 23 年度総会講演－

## 公衆電気通信の進展とそのもたらしたもの

齊 藤 健 (昭和 38 年電気卒)

わが国の公衆電気サービスは 1869 年東京－横浜間の電信サービスではじまった。その後の進展具合を大別して以下の 5 段階に分けて見てみたい。

### ① 「申し込めばすぐ付く電話」の実現 (1978 年 3 月) まで

「申し込めばすぐつく電話」が実現したのは、1978 年で 1890 年の電話サービス開始から 88 年の時間を要した。

この間、加入電信サービス (1985 年) が提供され、企業間通信の高度化に大きく寄与した。電話は公衆電話サービス (1900 年) 自動交換 (1926 年) の開始や長距離電話の通話品質の改良がすすめられてきた。1952 年日本電信電話公社が発足し 5 次に亘る電信電話拡充計画より本格的に電話サービスの充実期を迎えた。そして長距離ダイヤル市外通話開始 (1962 年)、太平洋横断海底ケーブル開通 (1969 年) など電話サービスも向上した。

電信電話以外のサービスではテレビジョン番組中継サービス (1954 年)、データ伝送サービス (1963 年) ポケットベルサービス (1968 年)、電話ファックスサービス (1973 年) が登場した。1972 年に公衆電話網が開放され電話回線に電話機以外の機器の接続が可能となった。

### ② 積滞解消～競争政策の導入 (1985 年 4 月)

1979 年全国の電話の自動化が完了し、より便利な電話や、コンピューターネットワーク構築のための通信回線サービスの要請も強くなりだし、自動車電話サービスが開始 (1979 年) され、データ通信用ネットワーク DDX 網がサービス開始された。ファクシミリ通信網サービス (1981 年) やテレビ会議システムサービスが始まった (1984 年)。

この間 60km を超える長距離通話料金が大幅に低下した。

### ③ 競争スタートからインターネット登場 (1993 年 11 月) まで

通信料金低減や新サービスの活性化のためには、国内通信は NTT、国際通信は KDD の一社体制でのサービス提供では限界があるということで競争政策が導入され、1985 年電電公社は日本電信電話株式会社となる。同時に通信機器 (端末設備) は通信会社以外の提供が可能となった (端末設備開放 1985 年)。これらの施策によって NTT、KDD 以外の第二電電、日本高速通信などの通信会社が生まれ、家電量販店には電話機などの通信機器が店頭を飾ることになった。

1985 年にはパソコン通信のアスキーネットがサービスを開始し、携帯電話サービスは 1987 年に始まった。携帯電話は、1989 年 KDD が MicroTAC でのサービスを開始し小型化の時代に入り、1993 年には第 2 世代携帯電話と呼ばれるサービスが開始し携帯でもデジタル化が始まった。

パソコン通信・コンピューター間通信の発展で、情報量課金をベースとするデジタル通信回線 INS ネット 64 のサービスが開始した (1988 年)。1993 年 インターネット・イニシャチブ・ジャパン IIJ がインターネット接続サービスを開始するに至ってインターネット時代を迎えることになった。

競争政策の導入によって料金値下げ競争、新サービス提供競争が活発化、ユーザーにとっても、サービス提供側にとっても大きく飛躍する時期となった。

### ④ インターネットからブロードバンド元年 (2001 年 12 月) まで

インターネットサービス開始に伴うインターネットの情報発信力の強さによって、社会・経済活動も変わる可能性が見えてきたこと

から、いわゆる新しいサービスが続々登場した。簡易型携帯電話サービス PHS が始まり (1987 年) 携帯電話普及と料金競争の引き金となった。コンピューター間通信のためのネットワーク (例えば OCN (Open Computer Network) が 1996 年サービスを開始し、1999 年には CATV ネットワークによるインターネットサービスや、携帯電話からのインターネット接続サービス (i モード) が始まり、大きな変化として、インターネット接続サービス用回線としてベストエフォートタイプ (品質保証が厳密でない) の ADSL 回線サービスが始まった。さらにはインターネット上で提供される IP 電話も登場し、ブロードバンド回線提供がはじまり (2001 年) NTT の光回線も開放され、携帯電話も第三世代の FOMA (NTT ドコモ) が登場した。

まさにこの時期はインターネットの拡大により有線・無線ともに多くの通信会社による新サービス提供競争の時期で、サービス提供にあたりベストエフォートの思想がもたらされたのは興味深いことである。

#### ⑤ ブロードバンド元年から次世代システムへ 2002 年～

インターネットは社会・経済活動に大きなインパクトを与え、利用者が増えるに従い、通信量が増加し、回線高速化とセキュリティ強化、使い勝手のよさが強く望まれるようになり無線 LAN サービスの開始 (2002 年)、ブロードバンドケーブル TV の開始 (2003 年) 等があり、2004 年には通信会社を替えても電話番号は変わらない「番号ポータビリティ制度」が開始した。2005 年には光ファイバーによる多チャンネル放送サービスがはじまり通信と放送の融合が始まった。このような高度化していく通信需要に対応するため、インターネットの特質を生かしつつ品質とセキュリティの強化を図った次世代ネットワーク NGN サービスが開始 (2008 年) した。また携帯電話ではスマートフォンが登場し回線の一層の強化が必要となり、より高速性と品質強化、容量増大を図った第 3.9 世代携帯電話・LTE のサービスが開始 (2010 年) した。

まさに、情報通信技術 (ICT) を活用し新しい価値を創造し、発展を遂げる時代に入った。

このような公衆通信サービスの進展のもたらしたものが我々の行動にどのような変化をもたらしたのか若干考察したい。

・共用から専用へ

通信手段が団体・家族などのグループでの共用から個人の占有となった。これにより企業活動や家族生活などにも大きな変化が現れ出した。また、振り込め詐欺などの犯罪が現れ出し、新たな社会問題となっている。

・情報入手手段の選択の多様性 マスメディア (産業メディア) からソーシャルメディアへ

インターネットの出現は新聞・雑誌・放送が主体の情報伝達・入手手段を大きく変えることになり、SNS・ツイッター・フェイスブックなどのソーシャルメディアは、社会体制の変革にまで結びつくような世論形成手段とまでなった。

・情報保護思想の浸透 インターネットの普及で各種の情報伝達は高速かつ広域性を持つようになり、個人情報保護法が制定された。(2003 年) しかし一部には行き過ぎた対応によって社会生活の大切な絆が薄れていくという指摘もある。

・パラダイムシフト インターネット (回線の再接続が極めて短時間で可能な回線) の出現で回線に要求されるものは「質より量」的な面が重視され接続料金の低廉な回線サービスとして ADSL 回線などのベストエフォート型のサービスが登場した。またサービスの対価も回線の接続距離・時間から距離に関わらずやり取りした情報量 (ビット) の多寡に対応するようになって来た。この変化は通信サービスの利用に大きな変化を与えた。

・ユビキタス社会、情報過多社会 何時・何処でも入手可能な大量の情報の中でどう行動するのか

何時・何処でも大量の情報を受・発信できるようになった今、これらの大量の情報を賢く利用し、社会や個人が発展していくためには情報リテラシーの向上に対する普段の努力が求められている。これへの取組みは個人・社会全般にとって大きなテーマである。

# 平成 23 年度岩手大学電気電子情報科会総会議事録

日 時：平成 23 年 6 月 11 日 (土)

15:00 ~ 15:40

場 所：岩手労働福祉会館

議 長：武田 寿郎 (電気 S41)

書 記：立花 龍一 (理事、情 S61)

木村 彰男 (理事、事務局、情 H3)

## ・第 1 号議案、第 2 号議案

事務局より平成 22 年度事業 5 件 (きたかみ 57 号発行、正会員歓迎会、草刈賞委員会活動、会費検討委員会活動、70 周年記念事業) についての概要報告があり、それに関連して平成 22 年度の決算報告が行われた。続いて及川会計監査より監査報告が行われ、特に異議なく、承認された。

## ・第 3 号議案、第 4 号議案

はじめに、平成 23 年度事業計画に関連して、事務局から以下の説明がなされた。

- きたかみ 58 号は 70 周年記念事業特集号として発行予定であること
- 正会員歓迎会、草刈賞委員会活動、会費検討委員会活動は昨年同様に行う予定であること。
- 電気電子情報科会 70 周年記念事業を開催すること。

引き続き、上記事業計画を勘案した平成 23 年度予算案について、70 周年記念事業費と

して 200 万円を新たに計上していること、H22 年度の年会費納入者のうち、既納者への返還分として 60 万円の支出があること、などが詳しく説明された。資料に載っていた基金会計の一部数値に変更があったため、その場で訂正の上、承認された。

## ・その他議案について

会長より、平成 23 年度科会役員名簿について以下の提案がなされた。

- 南幅副会長から、体調不良のため辞任したい旨の申し入れがあった
- これを認め、後任として柳橋理事 (事務局) を副会長としたい

特に異議なく承認され、柳橋新副会長より就任の挨拶があった。

続いて、柳橋副会長 (事務局) より、70 周年記念事業の予算案詳細に関して説明があった。太田原相談役より語句訂正に関する指摘があり、きたかみ増加分→きたかみ増ページ分と修正した上で承認された。

最後に、会長より、以下の方々から草刈賞にご寄付があったことが報告された。

- 故池田俊夫先生の奥様及びご家族。
- 小野幹雄氏 (昭和 19 年電気卒)。

また、故池田俊夫先生の奥様及びご家族からは科会にもご寄付があったことも報告された。



## 懇親会スナップ



若者二人



いい笑顔!

# 平成 23 年度電気電子情報科会役員名簿

(平成 24 年 1 月 1 日現在)

役 職 名	氏 名	卒業 (卒回)	役 職 名	氏 名	卒業 (卒回)
会 長	柏 葉 安兵衛	S 38 (気 11)	東京支部		
副 会 長	千 葉 則 茂	50 (気 23)	幹 事	柴 田 隆 昭	S 37 (気 10)
副 会 長	鳥谷部 達 雄	56 (情 3)	幹 事	飛 世 政 和	44 (気 17)
副 会 長	柳 橋 好 子	45 (子 1)	幹 事	山 田 均	47 (気 20)
理 事	小野寺 瑞 穂	29 (気 2)	幹 事	小 林 秀 雄	47 (子 3)
理 事	歳 弘 健	33 (気 6)	幹 事	在 家 宏	52 (子 8)
理 事	井 上 隆 志	40 (気 13)	幹 事	寺 井 正 行	41 (気 14)
理 事	田 山 典 男	41 (気 14)	幹 事	山 内 利 明	55 (気 28)
理 事	立 花 龍 一	61 (情 8)	幹 事	菊 地 紀 幸	61 (子 17)
理 事・事務局	柳 橋 好 子	45 (子 1)	幹 事	狩 野 利 之	61 (子 17)
理 事・事務局	長 田 洋	62 (気 35)	幹 事	加 瀬 貞 二	H 4 (子 23)
理 事・事務局	木 村 彰 男	H 3 (情 13)	盛岡支部		
理事・盛岡支部長	籙 福 寛	38 (気 11)	幹 事	宮 手 敏 雄	44 (気 17)
理事・東京支部長	澤 藤 隆 一	47 (気 20)	幹 事	岡 英 夫	48 (子院 4)
理事・仙台支部長	佐々木 良 治	43 (気 16)	幹 事	杉 村 洋 一	49 (子 5)
会 計 監 査	及 川 二千朗	38 (気 11)	幹 事	池 内 達	50 (子 6)
会 計 監 査	久保田 賢 二	42 (気 15)	幹 事	佐 藤 信	57 (子 13)
顧 問	佐 藤 淳	特	幹 事	佐 藤 文 昭	59 (子 15)
顧 問	志 田 純 一	特	幹 事	泉 澤 栄	60 (子 16)
顧 問	佐々木 經 夫	特	幹 事	高 橋 康 浩	62 (気 35)
相談役 (元会長)	阿 部 源 祐	16 (専 1)	幹 事	佐々木 正 嗣	62 (子 18)
相談役 (元会長)	佐 藤 源 美	17 (専 2)	仙台支部		
相談役 (元会長)	高 木 三 郎	17 (専 2)	幹 事	小 原 四 郎	37 (気 10)
相談役 (元会長)	岡 田 整 八	18 (専 3)	幹 事	板 澤 正 登	47 (子 3)
相談役 (元会長)	阿 部 長 一	19 (専 4)	幹 事	田 代 良 二	55 (気 28)
相談役 (元会長)	太田原 功	30 (気 3)	幹 事	佐 藤 雄 一 郎	H 3 (気 39)
相談役 (元会長)	佐々木 喜 八 郎	28 (気 1)	幹 事	柏 葉 安 宏	H 9 (電電 2)

# 平成 23 年度電気電子・情報システム工学科の構成員名簿

平成 24 年 1 月 1 日現在

電気電子工学コース (コース長 恒川佳隆 教授)			情報システム工学コース (コース長 西山 清 教授)		
分野	職 名	氏 名	分野	職 名	氏 名
電子デバイス工学	教授 准教授 准助	谷口 宏夫 岡 英数 西 館川一 向 川林 小 叶 叶 野崎	コンピュータ・ネットワーク工学	教授 准教授 講師 助	安西 人昭 鈴木 幸史 永平 司 佐藤 信太 藤山 久 山 豊克
電子システム工学	教授 准助	恒川 佳隆 長大 洋 本 樹 佐 明	知能情報処理システム工学	教授 准教授 講師	渡西 志清 三吉 二久 兼木 憲男 木 盧 忻
電気エネルギー工学	教授 准助	藤山 民也 高 浩一 成 晋也 高 和貴	メディアシステム工学	教授 准教授 准助 事務補佐	厚井 裕司 千葉 則茂 今野 晃市 藤本 忠博 明石 卓也 中谷 直司 松山 直胤 懸田 克 中 克 松 克 懸 平

技 術 部					
工学系 技術室	職 名		氏 名		情 報 技 術 室
	技術専門員	千 葉 茂 樹	副 技 術 室 長	栗 田 宏 明	
技術専門員	太 田 康 治	技 術 專 門 職 員	金 野 哲 士		
技術専門員	那 須 川 徳 博	技 術 職 員	田 頭 浩 平		
技術専門員	星 勝 徳	技 術 職 員			
技術専門職員	萩 原 由 香				
技術専門職員	千 葉 寿				
技術専門職員	庄 司 こと				
技術専門職員	志 田 寛				
技術職員	藤 本 甫				
技能補佐員	藤 沼 重 雄				

# 平成 23 年 年表

1/6	理事会・70周年記念事業・新年会打合せ 会長・事務局3人 盛岡支部長 岩手大学工学部
1/15-16	大学入試センター試験
1/22	22年度第4回理事会・科会70周年記念事業第2回実行委員会 14人 いわて国保会館 盛岡支部・科会新年懇親会 20人
2/1	岩手大学システム理工学系講演会 「電気自動車の仕組みと課題（純電気自動車を中心に）」一ノ倉理氏（東北大学大学院工学研究科教授）
2/1-2	平成23年度大学院博士前期課程第2期入学試験《平成23年4月入学》 電気電子・情報システム工学専攻 13名合格
2/2	入学願書受付締切。電気電子・情報システム工学科：前期1.9倍、後期9.3倍
2/2	草刈賞委員会（草刈賞選考委員会） 選考委員 電気電子工学科：恒川佳隆（電気電子工学コース長）・向川政治（学生委員） 情報システム工学科：安倍正人（情報システム工学コース長）・鈴木正幸（教務委員） 電気電子情報科会：柏葉安兵衛（会長）・太田原功（相談役・委員長）
2/3	「きたかみ」編集委員会 校正その他 会長・事務局3人 岩手大学工学部
2/14	「きたかみ」編集委員会 校正その他 会長・太田原相談役・事務局3人 岩手大学工学部
2/16	電気電子・情報システム工学専攻（電気電子工学分野）修士論文審査会
2/17	情報システム工学科卒業論文発表会
2/21	情報システム工学専攻（情報システム工学分野）修士論文審査発表会
2/21	電子情報工学専攻博士論文審査会（電気電子工学講座所属2名分）
2/23	電子情報工学専攻博士論文審査会（情報システム工学講座所属2名分）
2/25	平成23年度個別学力検査前期日程。電気電子・情報システム工学科 90名合格
3/1	新会員歓迎会打合せ 会長・事務局3人 岩手大学工学部
3/1	「きたかみ」57号発行 5000部
3/2	電気電子工学科卒業研究発表会
3/7	新正会員歓迎会 参加67人（新正会員・院生47人） 岩手大学工学部食堂
3/9	馬場守先生最終講義「バルクから表面へ—個人研究から共同研究への軌跡—」
3/11	東日本大震災発生 14時46分
3/12	平成23年度個別学力検査後期日程は東日本大震災のため中止 電気電子・情報システム工学科 31名合格
3/23	岩手大学卒業・修了者への証書授与（卒業式は東日本大震災のため中止） 工学部第59回卒業生：電気電子工学科68名、情報システム工学科62名 大学院博士前期課程第42回修了生：電気電子・情報システム工学専攻43名、電気電子工学専攻1名、情報システム工学専攻1名 大学院博士後期課程第13回修了生：電子情報工学専攻2名、電気電子・情報システム工学専攻1名
3/31	電気電子工学コース 馬場守教授 定年退職
4/1	松山克胤、山中克久の両氏を情報システム工学コース助教に採用
4/18	弔電 佐藤利三郎氏（16年電気卒）
4/20	ものづくりEF2010年度成果報告会（工学部第一会議室）
5/5	弔電 久慈幸雄氏（34年電気卒）
5/6	岩手大学入学者説明会（入学式は東日本大震災のため中止） 工学部入学生：電気電子・情報システム工学科145名 3年次編入学生：電気電子工学科3名、情報システム工学科3名 大学院博士前期課程入学生：電気電子・情報システム工学専攻63名 大学院博士後期課程入学生：電気電子・情報システム工学専攻1名
5/17	科会会計監査 及川二千朗監事・久保田賢二監事・柏葉会長・柳橋理事 岩手大学工学部
5/18	会長事務局打合せ 理事会提案事項について 会長・事務局3人 岩手大学工学部
5/21	平成23年度第1回理事会・科会70周年記念事業第3回実行委員会 23年度総会提案事項審議・70周年記念事業について 17人 アイーナ
5/26	総会会場打合せ 岩手労働福祉会館 事務局
6/1	開学記念日
6/1	岩手大学講演会「がんばろう岩手」 【第1部】招待講演「賢治の祈り—復興における文化の役割—」平田オリザ氏（内閣官房参与、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授） 【第2部】震災復興に向けた岩手大学の取組 ①「現代社会が学生に求める責務と奉仕」荻原亜弥香氏（大学院工学研究科博士前期課程、岩手大学公認学生ボランティア団体「天気輪の柱」代表） ②「災害被災者の心のケア」山口浩氏（人文社会科学部教授） ③「岩手大学における復興への取組について」藤井克己氏（岩手大学長、岩大復興対策本部長）
6/2	平成24年度推薦編入学試験。電気電子工学コース1名、情報システム工学コース1名合格
6/2-3	電気電子工学科スポーツ大会
6/11	臨時理事会・70周年記念事業第4回実行委員会 20人 岩手労働福祉会館
6/11	盛岡支部総会 岩手労働福祉会館
6/11	平成23年度岩手大学電気電子情報科会総会 30人 岩手労働福祉会館 平成22年度事業報告・決算報告、平成23年度事業計画・予算、科会70周年について等 講演「公衆電気通信サービスの進展とそのもたらすもの」齊藤健前支部長
6月中	情報システム工学専攻修士論文予備審査会《平成23年9月修了予定者》および中間発表会《平成24年3月修了予定者》（分野別実施）
6/21	大学院博士後期課程学位論文予備審査会（電子情報工学専攻・情報システム工学講座）
6/25	仙台支部総会 ハーネル仙台
6/30	会長事務局打合せ 住所録について 会長・事務局3人 岩手大学工学部
7/3	弔電 中村勝夫氏（20年電気卒）

7/6-7	平成24年度一般編入学者選抜試験。電気電子工学コース3名合格、情報システム工学コース6名合格
7/8	平成24年度大学院博士前期課程推薦入学者選抜試験。電気電子・情報システム工学専攻6名合格
7/14	記念事業実行委員会打合せ 会長・太田原相談役（表彰選考委員長）・事務局3人 岩手大学工学部
7/23	70周年記念事業第5回実行委員会 15人 岩手労働福祉会館
8/5	情報システム工学コース スポーツ大会
8/8	オープンキャンパス
8/25	理事会・実行委員会打合せ 会長・太田原相談役（表彰選考委員長）・事務局3人 岩手大学工学部
8/30-31	平成23年度大学院博士前期課程入学者選抜試験《平成23年10月入学》電気電子・情報システム工学専攻1名合格 平成24年度大学院博士前期課程入学者選抜試験《平成24年4月入学》電気電子・情報システム工学専攻34名合格 平成23年度大学院博士後期課程入学者選抜試験《平成23年10月入学》電気電子・情報システム工学専攻志願者なし 平成24年度大学院博士後期課程入学者選抜試験《平成24年4月入学》電気電子・情報システム専攻1名合格
9/3	平成23年度第2回理事会 23年度事業について 12人 岩手労働福祉会館
9/3	70周年記念事業第6回実行委員会 表彰について、祝賀会について その他 15人 岩手労働福祉会館
9/16	記念事業実行委員会打合せ 会長・太田原相談役（表彰選考委員長）・事務局3人 岩手大学工学部
9/26	記念事業功労賞副賞検討 盛岡市みたけ「みたけ工房」会長・太田原相談役・事務局3人
9/26	記念事業実行委員会打合せ 会長・太田原相談役（表彰選考委員長）・事務局3人 岩手大学工学部
9/下-10/上	電気電子・情報システム工学専攻（電気電子工学分野）修士論文中間審査
9/30	平成23年度岩手大学修了式・卒業式（岩手大学農学部付属農業教育資料館） 工学部卒業生：電気電子工学科1名、情報システム工学科1名 大学院博士前期課程修了生：電気電子・情報システム工学専攻 なし 大学院博士後期課程修了生：電子情報工学専攻 なし
10/1	平成23年度10月入学 大学院博士前期課程入学生：電気電子・情報システム工学専攻1名
10/4	記念事業実行委員会打合せ 会長・太田原相談役（表彰選考委員長）・寺井祝賀会実行委員長・千葉副会長・事務局3人 岩手大学工学部
10/15	ソフトパス工学総合研究センター設立記念講演会 「エコイノベーションによるグリーン成長～ソフトパス工学への期待～」山本良一氏（東京都市大学特任教授、東京大学名誉教授）
10/19	第1回「コミュニケーションデザインセミナー」 ＜岩手大学工学部附属ソフトパス工学総合研究センター・コミュニケーションデザイン研究グループ・環境や地域とのコミュニケーションデザイン分野-主催＞ 招待講演「巨大地震に対応した津波警報・緊急地震速報システム」堀内茂木氏（株式会社ホームサイズモメータ代表取締役）
10/20	記念事業実行委員会打合せ 会長・太田原相談役（表彰選考委員長）・千葉副会長・鳥谷部副会長・事務局3人 岩手大学工学部
10/22	オープンキャンパス（大学祭）
10/28	第2回「コミュニケーションデザインセミナー」 ＜岩手大学工学部附属ソフトパス工学総合研究センター・コミュニケーションデザイン研究グループ・環境や地域とのコミュニケーションデザイン分野-主催＞ 招待講演「環境音の情報を考える」柴山秀雄氏（総務省「公害等調整委員会」委員、元芝浦工業大学工学部教授）
10/29	東京支部総会 アルカディア市ヶ谷
10/29	岩手大学電気電子情報科会創立70周年記念式典・記念講演・祝賀会 アルカディア市ヶ谷 記念式典 表彰：草刈功労特別賞 草刈功労賞 記念講演 演題『岩手大学の62年、そして震災と復興』講師岩手大学長 藤井克也氏 祝賀会 173人
11-12月中	情報システム工学専攻修士論文予備審査会《平成24年3月修了予定者》および中間発表会《平成24年9月修了予定者》（分野別に実施）
11/4	電気学会東北支部岩手支所講演会、「大震災や超円高…求められる電気電子情報技術」澤藤隆一氏（S47年電気卒、三基計装代表取締役社長）
11/10	きたかみ編集委員会・記念事業実行委員会 会長・太田原相談役（表彰選考委員長）・事務局3人 岩手大学工学部
11/11	弔電 相馬重信氏（23年電気卒）
11/11	岩手大学システム理工学系講演会、「国内生産へのこだわり（岩手での物造り）」齊藤新一氏（S49年電気卒、大井電気代表取締役社長）
11/18	第3回「コミュニケーションデザインセミナー」 ＜岩手大学工学部附属ソフトパス工学総合研究センター・コミュニケーションデザイン研究グループ・環境や地域とのコミュニケーションデザイン分野-主催＞ 招待講演「町工場からのブランド構築」大高知子氏（大高知子エルゴデザイン研究所代表）
11/18	岩手大学システム理工学系講演会、「晴れて社会人になったなら-社会人の心得、就活にあたって-」池田隆夫氏（S35年電気卒、富士通エフ・アイ・ビー前代表取締役社長）
11/28	岩手大学システム理工学系講演会 「TOTO(株)のUD関連および福祉機器の研究開発事例について」佐藤稔氏（TOTO(株)総合研究所 健康技術研究グループ グループリーダー）
11/30	第4回「コミュニケーションデザインセミナー」 ＜岩手大学工学部附属ソフトパス工学総合研究センター・コミュニケーションデザイン研究グループ・環境や地域とのコミュニケーションデザイン分野-主催＞ 招待講演①「移動通信のシステム設計と電波伝搬特性」今井哲朗氏（株式会社NTTドコモ無線アクセス開発部担当課長） 招待講演②「携帯電話システムにおけるアンテナ技術」山口良氏（株式会社NTTドコモ無線アクセス開発部担当課長） 招待講演③「マルチアンテナ技術を用いたワイヤレスシステムへの適用」西森健太郎氏（新潟大学工学部准教授）
12/2	電気学会東北支部岩手支所講演会、「モバイルブロードバンドの発展とそれを支える計測技術および期待される技術者」田中健二氏（S49年電気卒、アンリツ代表取締役専務執行役員）
12/3	応用物理学会東北支部シンポジウム「グリーンテクノロジー時代の幕開け」
12/7	電気電子・情報システム工学専攻（電気電子工学分野）中間発表会



# 岩手大学電気電子情報科会会則

## 第1章 総 則

- 第1条 本会は岩手大学電気電子情報科会と称する。
- 第2条 本会は盛岡高等工業学校電気科、盛岡工業専門学校電気科、並びに岩手大学工学部電気系工学科及び大学院工学研究科電気系工学専攻の傘下に集った者の親睦を図り、緊密な連絡をとり、電気工学、電子工学、情報工学に関する知識を交換する。
- 第3条 本会の本部事務所は盛岡市上田 岩手大学工学部電気系工学科に置く。  
本会に支部を置くことができる。支部の設置は総会の承認をうけるものとする。
- 第4条 本会は第2条に定めた目的を達成するために会誌の発行、講演会等を行う。

## 第2章 会 員

- 第5条 会員を分けて特別会員、正会員、準会員とする。
- 第6条 特別会員は岩手大学工学部電気系工学科の現・旧教職員とする。
- 第7条 正会員は盛岡高等工業学校卒業生、盛岡工業専門学校卒業生、岩手大学工学部電気系工学科卒業生、岩手大学大学院工学研究科電気系工学専攻修了生、並びに役員会の承認を経た者とする。
- 第8条 準会員は岩手大学工学部電気系工学科の在校生並びに岩手大学大学院工学研究科電気系工学専攻学生のうち正会員でない者とする。

## 第3章 会 計

- 第9条 本会の会計は一般会計及び基金特別会計とする。  
基金は将来のために積み立てるものとする。但し、その利息は一般会計に繰り入れることができる。
- 第10条 会費は準会員入会時に入会費として10,000円を納入する。また、卒業後10年を経過した正会員は年会費として10年毎に10,000円を納入する。  
尚、納入した会費は理由の如何を問わず返却しない。
- 第11条 本会の収支は毎年4月末日に於いて決算を行い、会計監査を経て総会に於いて承認をうけ併せてこれを報告する。

## 第4章 会 議

- 第12条 会議は総会、臨時総会、役員会及び理事会とする。  
理事会は、会長、副会長、理事及び相談役を以て構成する。
- 第13条 総会は毎年1回会長がこれ招集して出席人員を以て成立する。
- 第14条 臨時総会は役員会に於いて必要と認められた時、会長がこれを招集する。
- 第15条 役員会及び理事会は必要に応じて会長が招集する。

## 第5章 役 員

- 第16条 本会に次の役員を置く。
- |      |      |                                   |
|------|------|-----------------------------------|
| 会 長  | 1名   | 正会員より選出する。                        |
| 副会長  | 3名以内 | 正会員より選出する。                        |
| 理 事  |      | 正会員より互選する。<br>尚、各支部長は理事を兼ねるものとする。 |
| 会計監査 | 2名   | 正会員より選出する。                        |
| 幹 事  |      | 正会員より理事会で推薦し会長が委嘱する。              |
| 顧 問  | 若干名  | 特別会員より会長がこれを委嘱する。                 |
| 相談役  |      | 元会長は終身相談役として委嘱するものとする。            |
- 第17条 各役員は任期は2ケ年とし、再選できる。改選は総会に於いて行なう。  
但し任期中欠員ができた場合は役員会に於いて選出し補充する。
- 第18条 会長は本会を代表しその事務を総括する。  
副会長は会長を補佐する。  
理事は本会の庶務を掌理する。  
会計監査は会計を監査する。  
事務局担当理事は本会の会計を掌理し、且つ金品物件の保管の責に任ずる。  
幹事は会員相互の親睦と連絡の任に積極的にあたる。
- 第19条 支部に支部長を置き、本部に準じて役員をおくことができる。

## 第6章 会誌、講演会及び座談会

- 第20条 本会は会誌「きたかみ」を発行して会員に配付する。
- 第21条 講演会及び座談会は随時行なう。
- 第22条 支部の内規は各支部に於いて定め、会長の認可を受けることにする。
- 第23条 会則の変更は総会に於いて過半数の賛成が無ければ変更する事ができない。

## 付 則

- 本会則の第10条の改定は、平成16年5月1日から施行する。
- (昭和17年1月1日制定)  
(昭和25年度総会一部改正)  
(昭和37年度総会一部改正)  
(昭和40年度総会一部改正)  
(昭和41年度総会一部改正)  
(昭和46年度総会一部改正)  
(昭和50年度総会一部改正)  
(昭和51年度総会一部改正)  
(昭和56年度総会一部改正)  
(平成4年度総会一部改正)  
(平成11年度総会一部改正)  
(平成12年度総会一部改正)  
(平成15年度総会一部改正)  
(平成20年度総会一部改正)  
(平成21年度総会一部改定)  
(平成22年度総会一部改定)

## 東日本大震災

宮手敏雄（昭和44年電気卒：岩手日報社）

昨年3月11日午後2時半すぎ、日比谷公園に近い新聞協会ビルでの会議が早めに終わり、帰りの新幹線は4時間後です。新聞社仲間と9階に上がりラウンジでコーヒーを注文した直後、経験したことがない激しい揺れに思わず立ち上がりました。壁際の本棚は倒れ、隣の高層ビルは大きくゆっくりしなっているのが窓越しに見えました。テレビの緊急地震速報に続く三陸の大津波警報、アナウンサーの叫びに近い声でラウンジはただならぬ状況に一変しました。前々日の昼前にあった地震と小津波の比ではなさそうだ、すでに携帯電話はつながらない。

協会ビル1階に1台だけあった公衆電話で本社の停電を知り、VPN電話がある銀座7丁目の支社に向かうが、広い車道まで溢れた人でタクシーなんか拾えません。パトカーのサイレンで騒然とした銀座通りは絶え間ない強い余震で、ビルの最上階は窓枠1枚分の幅で揺れています。出張カバンで頭を覆い、落下したプラスチック看板を縫うようにして支社に着き、テレビに映った巨大津波の生中継に言葉を失いました。本社にはVPN電話で連絡できました。共同通信本社からも「岩手日報社には普段通り記事、写真とも送信継続中」と聞きましたが、電気がなくては新聞は発行できません。電力復旧

の見込みは？企業内ネットワークなど重要回線は生きてるか？設備の損傷は？社員は全員無事なんだろうか？盛岡に帰る方法は？頭の中は不安と焦りだけでした。

お恥ずかしい話、岩手日報本社には発電機はありません。2系統受電しており入社以来15分を超える停電は経験していません。頼りは100KVAを20分間供給できるCVCFのバッテリーだけです。市内みたく4丁目で印刷工場がある制作センターには80KVAの非常用発電機がありますが、保安灯と消火設備だけで回転機を動かす能力なんかありません。次善の策として、1995年1月17日早朝に襲った阪神淡路大震災を契機に、東北5新聞社間で災害時に新聞の印刷発行を援助し合う協定を結んでいました。電力の再開見通しも立たず、発電機がある隣県社にお願いするしかありません。締結後初の協定発動でした。

午後5時すぎ、川又淳システム部員（平成10年情報工学科卒）1人と編集局員6人が乗って秋田魁新報社に向かったものの、46号線通行止めとの情報で引き返し、青森市の東奥日報社に向かいました。東北のほぼ全域にわたる広域停電で信号機が止まったうえ、青森県内の猛吹雪で4号線は大渋滞、到着したのは日付が変



1階天井まで浸水して大きく傾いた岩手日報大船渡支局。解体後、流出した陸前高田支局と合同支局として盛町に再開。



大震災・大津波後に発刊した写真集と特集。写真集は12万部を発行。

わる直前でした。そのころ本社ではネットワーク系と数台のパソコンだけに負荷制限していたCVCFのバッテリーもついに放電停止、急遽借り集めた4台のポータブル発電機でネットワークを維持していました。

生きていたインターネット回線が救いでした。制作システムの停止前に作った紙面をTIFFで送信しましたが解像度の違いからサイズが合わず断念、最小限の自社原稿はインターネットで送信、沿岸支局からも2台配備していた衛星携帯電話と陸路で記事と写真が届き始めました。編集組み版は東奥日報社で行います。未曾有の惨状の中、支援を快諾してくれた東奥日報社でも発電容量に限りがありました。新聞製作システムと輪転機負荷を交互に切り替えての運用です。12日午前7時に印刷が終わり派遣したトラックに4ページの朝刊を積み込んで盛岡に向かい配達は夜までかかり、配達できたのは全読者の75%が精一杯でした。

翌12日午前中から日本海側の復電が始まりましたが、盛岡の中心部は午後になり、周辺の住宅地は13日になったようです。陸前高田支局は流出して不明、大船渡支局は1階の天井まで浸水して大きく傾きました。大地震直後は支局の小型UPSでつながっていたVPNも徐々に不通になり、停電がなかった東京支社を除き支局通信網は全滅です。社員の全員無事が確認できたのは翌日午後になってからです。沿岸赴任者に避難経路と安全な取材場所の確認を徹底

していたのが幸いし、巨大津波に飲み込まれる多くの街を人の目線で撮影しました。社員は無事でしたが、沿岸に住む社員の家族4人と新聞販売店も8人が犠牲になりました。岩手県全体では2月現在4,670人が犠牲に、1,313人の行方が分かっていません。

復電とともに設備の点検を始めました。築50年になる内丸の本社ビルは20枚ほどの窓ガラスが壊れましたが設備は無事でした。火山泥流の層が深いみたけ4丁目の制作センターは揺れが大きく、空調ダクトが落ち立体紙倉庫の棚の8mm径ボルト30本が引きちぎれていました。輪転機も重要部品のずれや制御パソコンが壊れており、応急処置のため13日付の朝刊も東奥日報社にお願いし、14日から印刷を再開しました。東京で「帰宅困難者」を経験した私は秋田空港経由で13日昼前にやっと帰社できました。

こんな経験の総括も済まない4月7日深夜、再び襲った余震と広域停電で2度目の機能マヒに陥りました。この夜は秋田魁新報社に支援を依頼し担当者が向かいました。発生が深夜で紙面編集は完成、輪転機が回り始めていました。秋田魁新報社のシステムは当社と同じベンダーで、数年前から相互に担当者の操作訓練も行い、紙面のTIFFデータ交換もテスト済みでした。最大余震と広域停電の生ニュースを入れた1面を秋田で製作、残りは7ページに減らして当社で編集した紙面を伝送して発行しまし



45号線は片付いたが周囲はガレキの山＝宮古市高浜地区（4月19日）



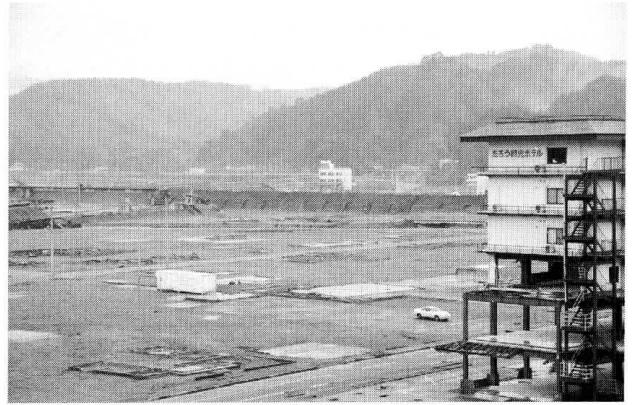
大学時代、毎年夏合宿して大好きだった海辺の街並みの無惨な姿＝吉里吉里地区（4月19日）

た。非常用自家発電機がないだけで青森、秋田の両新聞社の協力で、2度も紙齢をつなぐことができました。この苦い経験から本社は10月に210 V 250 K V Aを、制作センターには年末に660 V 1000 K V Aのディーゼル発電機を導入しました。

電力、通信、道路など社会インフラが壊滅すれば情報伝達もマヒします。IBC岩手放送の幹部が「こんなに頑張っても誰がテレビ見てる？と思うと空しかった」と述懐していました。電子メディアに食われる昨今、古典的なラジオと新聞が貴重な情報源になりました。避難所では助かった人々の名前と所在地の手書き掲示板に食い入る姿がありました。当社でも海戦術で5万人の避難者名簿を紙面とホームページで順次掲載し、ホームページは回線パンクが続きました。大震災で新聞用紙の製紙工場やインキ工場も被災、軽油とガソリン不足で資材物流や新聞配達の混乱は5月まで続き、新聞のページ数も制限しました。

福島県の先の見えない惨状と比べると、世界中から寄せられた支援で岩手は立ち上がりつつあります。念願だった平泉も世界文化遺産登録が実現し観光客が戻ってきました。雑用でドタキャンしましたが、昨年9月には大沢温泉で同期会が行われ27人の仲間が岩手を訪れてくれました。「復興元年」の今年は春からJ Rと自治体によるディストネーションキャンペーンが岩手で始まり、東北六魂祭に加え、最初で最後？

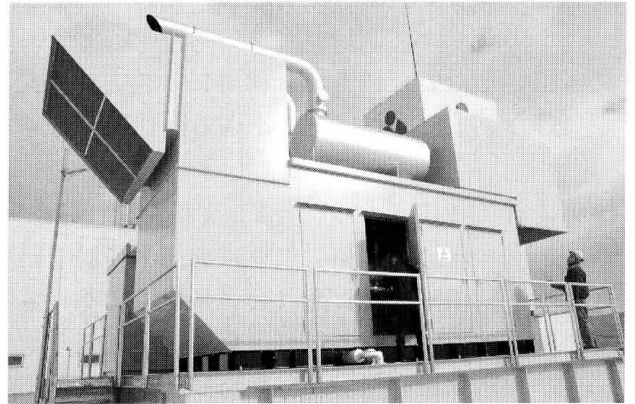
のプロ野球オールスター戦も盛岡で開催されます。全国各地の協力で沿岸浸水地域のガレキ処理が進み出しました。商店街や住宅の残った土台だけが街の痕跡です。荒涼とした風景は依然として残っていますが「これまで海から授かった豊かさをちょっとお返しただけ」と言う漁師さんの言葉が印象的でした。“白河以北一山百文”に住む東北人の民間活力は捨てたもんじゃありません。数百年あるいは千年に一度と言われる巨大津波の恐怖を忘れず言い伝えることが、この場に生きた我々の努めではないでしょうか。科会の皆様にとって第2のふるさと=岩手の復興を今後とも末永く見守ってください。



X字に配置した高さ10mの防潮堤も乗り越え、堤の海側の懐かしいホテルは4階まで浸水したという=宮古市田老地区（11月6日）

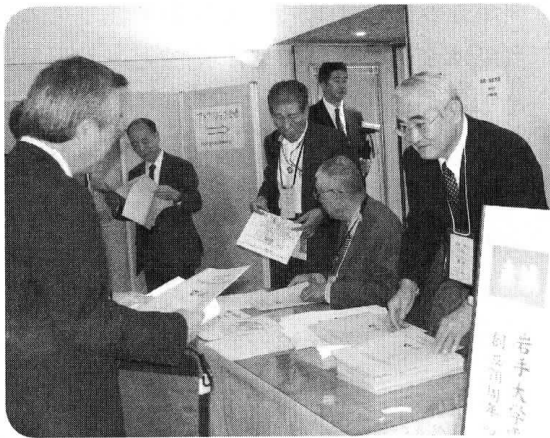


海拔20mほどの高台にも巨大津波が襲っていた=釜石市両石地区（4月19日）

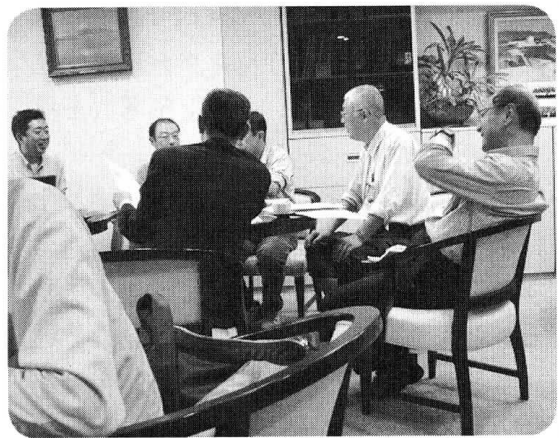


制作センター屋上に完成した1000K V A非常用自家発電機（12月24日）

# 「きたかみ」58号トピックス



受付風景



祝賀会事前打合せ風景

## 編集後記

昨年は私たちにとって一生忘れられない、決して忘れてはいけない年でした。

千年に一度と言われる地震と津波、そして福島原発の事故は、そこに住む人たちの大切な生命や生活を奪ってしまいました。

被災した方々に心からのお悔やみとお見舞いを申し上げます。

私たちに出来ることは何かを模索しているうちにもうすぐ丸一年、その日を迎えます。

そんな中で開催が危ぶまれた70周年記念事業ですが、こんな時だからこそ集まって繋がりを強めようと、記念式典・記念講演会・祝賀会に沢山の会員が参加して下さいました。

「きたかみ」58号は、創立70周年記念特集号と銘打ってお届けします。

上の写真は東京支部による祝賀会実行委員会の会議と当日の受付の様子です。70周年記念事業の成功は偏に裏方の皆さまの緻密で地味な活動によるものと感謝と敬意を表します。

また、東京支部のお二人には「きたかみ」編集委員として祝賀会の記事を担当していただきました。

記念事業特集とともに東日本大震災の記事も載せたいと、岩手日報社勤務の宮手敏雄さんに無理矢理お願いしました。報道現場からの記事は貴重な記録となるでしょう。

ご寄稿いただいた皆さま、編集にご協力いただきました方々に御礼申し上げますとともにいつもながら無理な要求に即対応して下さいる阿部謄写堂さんに感謝です。

編集委員 寺井 正行 (東京支部名誉支部長：昭和41年電気卒)  
飛世 政和 (東京支部事務局：昭和44年電気卒)  
柏葉 安兵衛 (会 長：昭和38年電気卒)  
長田 洋 (事務局：昭和62年電気卒)  
木村 彰男 (事務局：平成3年情報卒)  
柳橋 好子 (事務局：昭和45年電子卒)

### きたかみ 第58号

発行日 平成24年3月1日  
発行者 盛岡市上田4丁目3番5号  
岩手大学工学部内  
岩手大学電気電子情報科会  
☎ 019-621-6381  
印刷所 (株)阿部謄写堂  
盛岡市本町通2丁目8番37号  
☎ 019-623-2361

岩手大学電気電子情報科会  
創立70周年記念DVD  
記念式典・記念祝賀会

思い出の歌♪歌い継ぐ思い♪

盛岡高等工業学校  
電気科道遥歌

同袍寮歌

盛岡工業専門学校  
電気科道遥歌

岩手大学学生歌



創立70周年記念祝賀会実行委員会

2012年1月1日

Pressed in Taiwan